

アルディア

18 mel zan
xia 79
2007-05-26
ridia lutia
seren arbazard

<かみさまの懺悔>

泉のみやこ、アシェルフィ。月が泉に映る夜、一人の青年が座っていた。
皆で暮らすアルバザードの一軒家。その屋上で、彼は涼風を感じながら月を見ていた。
ふと名前を呼ばれて振り返ると、少女がいた。青年が微笑むと、少女は横に座った。
少女は青年の肩に頭を乗せると、耳元で囁いた。

「ねえ、どうして世界はあるの？」
青年は静かに答えた。
「最初の神さまがこう思ったんだ。ひとりにはさびしい——って」

「そうして世界はできたの？」
「そう。創造主はうそをついたんだ。たったひとつの小さな嘘を。
そして嘘の上にもうひとつ嘘を作ったんだ。
いつの間にか嘘は空高く積みあがって、塔になった」

「誰も嘘を咎めなかったの？」
「だって最初の嘘がばれてしまったら、世界は消えてしまうから。
みんなは嘘を吐き合うことで安心したんだ。みんなが同じ嘘を言えば、いつかその嘘が
本当になるんじゃないかって思ったんだ」

「それじゃあこの世界は嘘という無でできているの？」
「そう、嘘でできている。だけど無じゃない。嘘が集まると、すごくたまにだけど、何か
が生まれることがあるんだ。世界はその「何か」でできているんだよ。無ではないんだ」

「難しいんだね」
「そうだね。たくさん嘘はややくいしいんだ。きっと、ついた本人も分からなくなってしまうほどに。
そうして、ひとつの嘘にすぎたんだ。ただの強がりも嘘さえも、願えば「ほんとう」

になるんじゃないかって思ったんだ。

これは、そんな寂しがりな神さまが見ている夢なんだ」

「だけど、カミサマ、言ってたよ」少女が微笑む「最近は何も見ることができなくなった。神さまね、もうあまり眠れないんだって」

「じゃあ……」青年は首を傾げる「世界はどうなってしまうんだろう？」

「それで、神さまは自分の夢を人に喋ったのよ」

「なぜ？」

「人の記憶に残ることが、夢を生かすことだからよ」

「ああ」青年は寂しそうに微笑みながら頷いた。

少女は青年に抱きついてキスをした。

「誰かの中で生きることで、嘘は命を持つのだ。

そのために神さまはどれだけの犠牲を払ったのかしら。

これはそんな寂しい神さまのおはなし。

かみさまの、懺悔」

<小さな鍵>

mel 2 zan mel

べつに、この世のすべてが嫌だったわけじゃない。
ただ、ちょっとしたことの積み重ねに耐えられなくなったんだ。

気付いたときは一人だった。
けど、好きで孤独を選んだわけじゃない。

自分より不幸な人間はたくさんいる。
恵まれてる自分。だけど、決して幸せじゃない。

そんなとき、魔法の扉を見つけた。
幻の扉だってことは分かっていたけど、手に持った小さな鍵で、静かに開けてみた。

<異世界>

……眩しい。

目を開けた。

……昼だ。太陽が見える。

俺は……寝ていた。地面に。

——地面に？

そう、地面に。土だらけの乾いた地面の上に、仰向けで倒れていた。

空気が……違う。

どこと？

いや、分からない。はじめからこんな空気だった気がしないでもない。

ゆっくり身を起こした。辺りを見る。何も、ない。

ここは、山道？後ろを振り返ると、崖に大きな穴が開いている。山間の洞窟だろう。どこに繋がっているのかは分からない。

左右には山々。崖しかない。

前方には道が続いている。山のくせに坂が急ではない。ゆるやかな台地だ。

空が青い。よく見れば鳥が遠くで飛んでいる。

山は剥げて茶色い。まばらに木が生えている。

ここは……どこだろう。

ゆっくり立ち上がった。

あれ？

……腰に何か付いている。

剣だ。

何で剣なんかを差しているんだろう。

自分を見てみた。布でできた簡素な上着が 1 枚。茶色い布だ。頭の部分が割り貫かれています。亀みたいに頭を出して上から着ている。ボタンなんかない。

下は黒いズボンだ。少し丈夫な布でできている。腰のところの紐で結わってある。

腰には帯剣用のソードベルトが巻かれていて、鞘を支えている。家畜の革だろうか、随分硬い。バックルには金属が使われている。錆びては……いないようだ。

まいったな。こんなところで一人か。
道なりに歩き出した。ここにいてもしょうがない。

自然の豊かなところだ。だが、土壌が悪いのか、土地は肥沃でない。
いま季節はいつなんだろう。そうか、俺は時間も分からないんだ。ここがどこか、いま
がいつか、それも分からない。

ただ、気温は高い。夏のような。冬でなくてよかった。凍えてしまうところだ。
湿度が低いのか、乾いている。乾いていて暑いから快適だ。
木立が偶に見えるが、背の高く細い木がまばらに生えている。地面はぬかるんでおらず、
夏だというのに虫の気配はあまり感じられない。
地面に落ちている葉っぱも乾いている。苔やキノコが見られない。ころなしか地面が
白んで見える。木も少し白んで見える。
木立の中を風が走った。さわさわと揺れる木々。
……心地良い。

小一時間歩いたところで鼻がひくつとした。何か匂いがする。木の匂いではない。風に
乗ってやってきたのは……火の匂いだった。
何かが燃えるような匂い。この先だ。

歩いていくにつれ、正体が分かってきた。
そこは村だった。村が燃えていた。

やっと見つけたと思ったら火事か。
柵を越えて中へ入っていった。火消しくらいなら手伝おうと思った。
火事の中心に行ったら、家が燃えていた。
これは……ひどい。火が家中を取り巻いていた。

目の前を大人が通った。
声をかけようとして、異変に気付いた。
それは大人にしてはあまりに大きすぎた。
大人より頭2つほど大きく、体が4周りほど大きい。ほとんど半裸で、獣の皮を纏って
いた。手には大きな棍棒。

なんだこいつ。
それは人ではなかった。動物園で見るような巨獣でもなかった。簡単にいえば、そう……

魔物だ。

体が咄嗟に危険を感じた。辺りを見回す。人はいない。誰も、いない。その代わりいたのは、こいつらの仲間。

そうか、この村は燃えていたんじゃない。燃やされていたんだ。

走り出した。逃げるしかない。

獲物を見つけた山猫のように、魔物が唸りを上げて追ってくる。

自分の息が荒い。緊張で一瞬にして口がカラカラだ。走り出したばかりなのに心臓が止まりそうだ。後ろは怖くて振り向けない。振り向いたら真後ろにいそうな気がした。

おいおい、オイオイ！

何だよ、これ。

どう走ったか自分でも分からないけど、とにかく走った。地理感がないのできつと辺りをぐるっと周っただけだと思う。けどどうにか魔物を撒くことができた。

何が何だか分からないけど、早くここから逃げよう。

こそこそと小走りしだしたとき、悲鳴が聞こえた。

それは魔物にしては甲高い声。そう、いかにも人間のものだった。

俺は声のしたほうを振り向いた。

女の子だ。

前方には女の子がいた。彼女の前にはあの魔物がいた。

女の子は目を丸くして魔物を見上げている。怖くて立ち上がれないようだ。走って逃げることもできない。

俺は一瞬立ち止まった。魔物はまだ俺に気付いていない。その代わり、女の子を見据えて棍棒を振り上げた。

ダメだ、俺じゃ勝てない。助けに行っても助けにはならない。殺される。そしたら女の子も死ぬ。結果は変わらない。

ぐっと脚に力を入れた。

「もしあのとき勇気を出していたら、自分の人生は今とは違ったものになっていたんじゃないか」

「願いが叶うのを待っているだけじゃ、いつまで経っても何も変わらない」

そんなことは分かってる。そんなこと、きっと誰だって知ってる。それができればみんな

な苦勞はしないんだ。

そうやって諦めて、勇気を笑って、シニカルに生きてきた。これからもそうやって安全に長生きするだろう。

でも、あるときふっと思うんだ。

「もしかしてあのとき手を出していたら、声をかけていたら、上手くいったかもしれない」

「もしかしたら大怪我もなく、心が傷つくこともなく、上手くいったかもしれない。あのとき勝負に出ていれば、こんな腐った生き方をしていなかったのかもしれない」

「俺は……今まで何をして生き、これからも何のために生きるのだろう」

誰だっただま一には勇気を出す。一度も出さないで死ぬ奴なんていない。

いつかどこかで勇気を出すときが来る。あるいは出したことが過去にある。

まだ出してない俺は、いつかきっと勇気を出すんだろう。そんなときがいつか来る。

だが待てよ。それが今でないなんて誰が言った？

勇気を出すときが今でないなんて誰が決めた？

決めるのは誰だ。……そんなの決まってる。

俺だ

脚に込めた力で精一杯地面を蹴って走り出した。

鞘から剣を抜く。魔物に向かって跳ぶ。

子供の俺の力じゃ、切りつけたところでこんな大きな奴は倒せない。

けして、薙がない。——刺す。

子供の腕力を最大限に活かす。肩を支点に腕を柔らかく伸ばす。この腕に体重を乗せる。

切先が魔物の背中に触れた。狙うは肝臓。心臓は小さすぎて狙えない。背面からの場合、肋骨に邪魔されることはないが、誤って肩甲骨に当たって弾かれる場合がある。だから脊柱以外に骨のない消化器周りを狙う。これなら剣も折れない。

魔物の肌に触れたところで一気に力を入れる。肩甲骨を柔軟に動かし、僧帽筋と広背筋から力を出す。大胸筋を絞ることでさらに威力を増す。腹から声を出して筋肉を絞る。脇を締めて剣をふらつかないよう安定させる。

すると、剣は魔物の背中に吸い込まれるように入ってしまった。

一瞬の間を置いて、魔物が咆哮を上げる。

俺はすかさず剣を抜いた。出血させるためだ。臓器を貫かれ、魔物は血を吐き出した。俺は剣を振り上げて間合いを取る。

一秒ごとに相手の生命力は減っている。

時間を稼げ。無理に近付くな。

そして何より、ビビるな！

そうすれば俺の勝ちだ。

魔物は片手で傷口を押さえると、右手で棍棒を振り上げた。

まずい、予想以上に速い。相手の筋肉は人間より強い。腕も太い。このくらいの棍棒なら藁のように振り回せるのだ。

ダメだ、剣で受けたら剣も腕も折れる。振りかぶったまま前足を蹴って後ろに跳んで棍棒を避ける。だがこれが甘かった。大きな魔物のリーチは長い。こちらの跳躍よりも相手の踏み込みの方が長い。

棍棒が振り下ろされた。咄嗟に剣で受ける。だが力が違う。腕に尋常ならざる重みがかかった。なんだこれは。まるで天が俺の腕の上に落ちてきたような威力だ。

体ごと後ろに弾かれた。こうなったら吹っ飛んで受身を取ったほうがダメージは少ない。地面に転がり込む。

すかさず立ち上がる……が、膝が笑って起き上がれない。ダメだ。腕が痺れて動かない。もしかしたら折れてるかもしれない。いや、折れているに決まっている。

だが、そんなことより問題は目の前の魔物だ。棍棒を振り上げている。

まずい。勇気を出すべきときを間違えたようだ。

チラと女の子を見る。もうそこにはいなかった。俺の代わりにあの子は生き延びたんだな。だけど、助けてやったのに見捨てて逃げるなんてひどいよな。

でもまあ人間なんてそんなもんか。助けに入った俺がお人よしってことだ。

こうやって俺は今までずっと損をしてきた気がする。ちょっと頑張ろうと思ったらすぐこれだ。

女は男に助けってもらってばかりだな。男の代わりに身を呈して死んだなんて聞いた試しがない。

囚われのお姫様はいつでも最後まで助けきった強い男に微笑むんだ。俺じゃない。弱い俺に姫さんは微笑まない。

冷やかに笑った。

……ふざけやがって。

最後は見てやる。相手を見たまま死んでやる。

魔物を睨みつけた。

そしたら俺の目は月みたいに丸くなった。

なんだか知らないけど、棍棒を持った右腕に、あの女の子がしがみついていた。

目を丸くしたまま思わずふっと笑ってしまった。なんだ、こいつ。何をそんな一所懸命へばりついてるんだ。お前、逃げたんじゃないのかよ。逃げろよ。せつかく助けたんだから。俺と同じくらいの背のくせして、お前に何ができるんだよ。

魔物が右腕を振り下ろすと、女の子は地面に振り落とされた。右半身から地面にぶつかり、犬のような悲鳴を上げて地面を転がる女の子。魔物はすかさず棍棒を振り上げた。

そのとき、ふっと自分の意識が遠のくのが分かった。同時に、青い炎が俺の全身を包んだ。心なしか下から上に向けて空気が流れる。前髪が揺れて、額が顕わになる。

額には光を放つ紋章が現れていた。

女の子と魔物が驚いて俺を見る。俺が右手をかざすと、青い炎が集まった。それは光線となって魔物を照らした。魔物は咆哮を上げながら、その光に飲まれ、消えていった。

魔物の咆哮を聞くと、辺りにいたほかの小さな魔物たちが急に撤退しだした。どうやらいま倒したのは魔物のリーダーだったようだ。

撤退中に雨が降ってきた。俺は立ったまま、女の子は地面に這いつくばったまま、互いに見つめ合っていた。俺の青い炎は雨に打たれて、家を燃やしていた炎とともに消えた。

魔物が撤退したのを見届けると、俺の意識はなくなった。

<少女リディア>

次に目を開けたら天井が見えた。そして、俺を覗きこんでくる女の子の顔が見えた。俺と目が合うと、最初少し驚いたような顔をしたが、すぐに微笑んできた。

俺はゆっくりと起き上がった。どうやら焼け残った家の中のようだ。ここは誰かの一室のようだ。状況からするに、この女の子の部屋なのだろうな。それにしてもどうやって俺をここまで運んだのだろう。

「あなた……」女の子が声をかけてくる「……だあれ？」

「誰……？」俺は呟く。そうだ、俺は誰だろう……。どこの誰で、どこから来たのだろう。俺は何も答えずに黙っていた。

「……どこから来たの？」

それはこっちが聞きたい。

「ここはどこなんだ」

逆に問い返してみた。

「ここは……サプリよ」

「サプリ？」聞いたことないな「どこ？」

「どこって……アルバザードの」

「アルバザード？」

すると少女は怪訝そうな顔をする。

「あなた、アルバザード人じゃないの？アルバザードを知らないってことはこの辺の国の人でもないよね。だけどあなたの言葉は方言じゃないし、外国語でもないのね……ふしぎ」

「言葉が通じる……」

「そうだね。言葉、通じるね。だけどアルバザード人じゃないの？おかしいね」

「そうだな、おかしいな。じゃあきっと俺には記憶がないのかもしれないな」

「そうかも」女の子は神妙に頷いた「きっとそうだね。じゃあ、名前は覚えてる？」

「名前……。…………セレン」

「セレン……君？」

「ああ」

「名前は覚えてたのね」

「それより、この……サプリ？この村はどうしたんだ。俺が来たときはもう既に燃えていたみたいだけど。それにあれ、あいつらいったい何なんだ。あの化け物」

「kaila、大きい人という意味の魔物よ。アデルの一種。でも、見たのは初めて。ここにはあんなの来なかったから」

「アデル？そのアデルがサプリを襲ったのか？」

「そうみたい。どうしてだか分からないけど。突然なの。いきなり出てきて家が焼かれて」
魔物がサプリを襲った理由はなぜだろうと考えたが、彼女に分かるはずもないな。

「そうか……。でも無事で良かった」
「私はあなたのおかげで助かったけど……」
「けど……？」
女の子はしくしくと泣き出した。
「お母さんが……しんじやった」
「……」

女の子はそれからしばらく泣いた。
「なあ、これからどうするんだ？家は半分焼けているし、お母さんも……。お父さんはいないのか？」
「お父さんはいないの。どうなっちゃったか分からなくて。今日村に帰っていたらきっとお父さんも……」
「そうか……。兄弟や親戚は？」
「いないの」
「そうか……。じゃあこれからどうしようか」
「セレン君はどうするの？どこから来たのかも分からない。分かっているのは名前だけ。どこに帰るの？」
「さあ、帰る場所なんてないな」
「じゃあ……どうするの？」
「分からない」と言って寝転んだ「悪いけど、今日は泊めてくれないかな。朝になったら別の街に行ってみるよ。子供でも働かせてくれる場所を見つけないと」
「え？」女の子は慌ててベッドに乗って、顔を近づけてくる「行っちゃうの？」
「そりゃな」
「いや！行かないで！しばらく一緒にいてほしい」
女の子はまた泣きそうになった。
「わ、分かったよ。またあいつらが来るかもしれないし、落ち着くまではここにいる。でも、生活はどうするの？お金とか仕事とか」
「大丈夫、私たちは子供だから王様から保護を受けられる。ご飯は食べられるし、学校にも行けるよ。家は焼け残ったところを使えばいい」
「そうなんだ……」

なんだか急に身の回りのことが決まっていくのが不思議だった。窓の外を見ると、夕日が赤く染まっている。屋には天涯孤独だったのに、夕方にはもう家と同居人ができてしまった。人生、分からないものだ。

でも、もしあのとき逃げていたら？きっと俺は今頃どこかの街を目指して歩いていたのだろう。この子と知り合うこともなく。

「あのさ、君の名前は？まだ聞いてなかったね」

夕日に映えた女の子の顔は、すす汚れていたけど、可愛かった。

「……リディア」

「ん？」

「あたし……リディア」

<神の夢>

夢を見た。

女のように綺麗な男が金髪をたなびかせながら立っていた。

「……だれ？」

「悪魔」

「え？」

名を問うたら悪魔と応えた。思わず聞き返してしまった。でも、どうやら悪魔らしい。

「悪魔が何をしにきたんですか」

俺は白い部屋にいた。部屋といっても広すぎて壁が見えない。床には何も無い。空まで白い。

「君におとぎ話を」

「……どんな？」

「神さまの話。

聞いたことがあるだろう。最初の神アルテはエルト神とサール神に分かれた」

初めて聞くような、それでいて昔から知っているような、そんな気がした。

「彼らは男女の神。決して子をなさぬと決めた仲。しかし愛が裏切りをもたらした。子をほしがるサールがエルトを騙した。サールは内緒でエルトの子を身ごもった」

「そして生まれた娘がユーマ、僕ら人類の祖先だね」

「ユーマが生まれたせいで世界がひずんだ。ではその理由は？」

「サールが出産でヴィードを失い、エルトと拮抗していた力関係を崩してしまったから。世界のバランスを保つ2人だったのに、力のバランスが崩れてしまったんだ」

「その結果、悪魔チームス、私たち悪魔の母が生まれた」

「お兄さん、夢の中で僕の子守しているの？あいにく僕はもう眠っているんだ」

そう、おとぎ話はたくさんだね。

「では、この世界を作ったのは誰だろう。この世界に私たちが産んだのは？」

「それはアルテでしょ。アルテが分離して色んなものになって、最終的に僕らになった」

「アルテはどうして他者を作ったのかな」

「それは……寂しかったからじゃないかな。だって、一人だし」

「合格だ、いい成績が取れる」

「夢の中まで授業？」

「だが、いい成績は学校までだ。事実は違う」

悪魔は囁く。

「こんな風に考えられないか？もし、世界を作ったのがアルテでなかったら？アルテさえも誰かの作り物だったとしたら？」

「ばかげてる。それなら誰が最初の創造主なのさ」

悪魔はふっと笑うと空中に浮いた。

「こんな風に考えられないか？」

この世は「僕」だけが存在する孤独な世界だったという可能性を」

悪魔はゆっくりと宙に消えていった。

この世は神の夢。見ている本人だけが実在する。

<魔法の授業>

mel 2 zan ral

朝起きたら見慣れぬ天井だった。

「ここは……」

そうだ、俺は昨日よく分からない国のよく分からない村に来たんだ。そこで魔物に襲われていた少女リディアを助けたんだ。

そして親を失った彼女に頼まれ、しばらく一緒に暮らすことになったんだ。

ベッドから起き上がろうとしたら、そこにリディアがいるのに気付いた。彼女は床に座り、ベッドに上半身に乗ったまま、うつ伏せで寝ていた。

どうやら寂しくてベッドを離れなかったようだ。俺は撫でようかと思ったが、気恥ずかしいので声で起こした。

「リディア」と呼びかけると彼女はううんと言いながら起きだした。そして少しぼーっとすると、俺を見て「ああ……」と呟いた。そして一瞬安心した顔になると、急に悲しそうな顔になり、また戻った。親のことを思い出したのだろうか。

起きたら親を失っていた朝。そんなのはすべて夢であってほしいと思うはずだ。

「……おはよう」と言ったら、「おはよう、セレン君」と返してきた。

居間に行って食事の支度をした。お母さんが使っていた食器を譲ってくれた。何だか彼女の母親を本当に殺してしまった気がした。思い出を塗り替えることで本当にお母さんを死者にしてしまったと思った。

食事を取るとリディアは学校を休むと言い出した。俺は黙っていた。

しばらくすると隣家の大人がやってきて労わってくれた。配給の手続きを代わりに済ませてくれたそうで、生活はこれでどうにかなるそうだ。

リディアは暗い気持ちを消そうとしてか、俺の素性を探ってきた、どこから来たのかなどということ矢継ぎ早に聞いてくるが、俺は知らない。思い出せないのだ。

「本当に記憶がないんだね」

「そうみたいだな」

「でも知能や力は失ってないんだね」

「記憶喪失はそういうものだと思う」

「そっか。じゃあ何が得意なの？得意なものが分かれば今までに何を練習してきたか分かるよ。それで少しは記憶を思い出せないかな」

「なるほどね」

「格闘と魔法のどっちが得意だった？」

「え？」

しれっと言うリディアに俺は言葉を失う。

魔法？

格闘は分かる。でも魔法って……？

「魔法って？」

「魔法よ？」

「……使えるの？」

「……使えないの？もしかしてセレン君不良？真面目に勉強とか練習とかした？」

「使えないよ。そもそも魔法が何か知らない」

「知らない？え、一切使えないって意味？記憶喪失で言葉も失ってないのに魔法の存在を忘れてるの？考えられないなあ……」

呟きながらリディアはドアを開ける。外に出るようだ。付いていく。

家の前を少し歩くと川原と川があった。周りには木が生えている。

「そりゃ男の子だから魔法は苦手かもしれないけど、全然使えない人なんていないよね」

「そうなの？とにかく魔法が使えるなら試してみてくださいないか」

「いいよ」

リディアは足を肩幅に開いて立った。両手を下に伸ばし、手のひらを微かに丸め、前に向ける。背筋を伸ばして呼吸を整える。するとリディアの体が赤く光りだした。彼女の周りに赤い光のベールがかかる。

「ketta, fai!」

リディアの声とともに空中に火柱が立った。

「わっ！」

俺は驚いて身を引いてしまった。リディアは少し驚いた顔で俺を見て、くすくすと笑う。

「今のが魔法？凄いね」

「凄くないよ、みんなできるもん」

火で親を失ったわりに火が怖くないのか……。きっと火の魔法はそれほど当たり前のものなんだろうな。

「どうやって使うの？」

「ヴィルを火に変えるのよ」

「ヴィル？」

「セレン君、何も覚えてないのね。でも私もヴィルが何かまでは説明できないんだ……」

そういえばリディアは俺と同じくらいの子供だ。無理もないか。

「じゃあ私が教えてあげようか？」

ふいに後ろから声が聞こえた。大人の声だ。

振り向くと、綺麗な女の人が立っていた。ふわふわした金髪で、目が青い。そしてとても綺麗だ。

「あ、先生！」

リディアが走って抱きつく。

「リディア、その人は誰？」

「リーザ先生。小学校の担任よ」

「リディアさん、この子は？」

「セレン君。どこから来たのかも分からない外国の男の子よ。魔法も何も知らないの。記憶がないんだって。名前しか分からないのよ」

「でも言葉は通じるみたいね」

「そうなの、不思議でしょう？」

リーザ先生は子猫のようにじゃれるリディアを撫でた。

「リディアさん、お母さんのことは悲しかったね」

「……うん」

「悲しいけど、あなたのことは先生が守るわ。安心して」

「……ありがとお」

リディアはひんひん泣き出した。

先生はリディアを撫でると、俺に近づいてきた。

俺は身構えてしまって硬直した。先生はにこっと笑った。あまりに綺麗なんだが、何ともいえず逆らえないような雰囲気が出て、俺は自然と恭順な態度を見せた。

「はじめまして、リーザ先生」

「はじめまして、セレン君。それじゃあ私がリディアさんの代わりに授業をしましょうね」

「お願いします」

「ヴィルとは何か。その前にヴィードについて話しましょう。2人とも座って」

近くの岩を指す。大人しく座る。先生は棒切れを拾うと、土が出ているところに図を描き出した。

「この世にはヴィードというエネルギーがあるの。」

ヴィードは3種類。ユノ、ヴィル、ノアよ。

どれも光なの。

青がユノ。

赤がヴィル。

緑がノア」

「ユノ、ヴィル、ノア……」復唱した。

「ユノは生命力や体力を意味するの。なくなると体が疲れて、死んでしまうわ。ユノを使うとこんなことができるわ」

先生の体の周りに青い炎が現れた。先生が一瞬燃えてしまったのかと驚いたが、違うようだ。

「これがユノ。力の源よ。生活するだけで減るわ。運動するととても減るの。栄養をしっかり採ってしっかり寝ないと回復しないわ」

先生は木に向けて手を向けた。すると昨日俺が魔物にやったように光線を放った。光線は木に当たると、木に穴を開けた。俺は目を丸くした。

「ユノの特長は変形しやすいことね。体から出しやすいことも特長よ。今みたいに攻撃することもできるし、ユノが足りない仲間に与えることもできるの」

「便利ですね。撃ったら疲れるんですか？」

「たくさん撃てば疲れるわ。ユノの少ない人ほど疲れやすいのよ」

「なるほど……」

「次にヴィル。ヴィルは魔法の力よ。2つの使い道があるわ。

1つは今リディアさんが見せたように魔法の力に変えること。

もう1つは神々の栄養素である alef に変換すること」

「アレフ？神の栄養を作ってどうするんですか？」

「神を召喚し、力を貸してもらうためよ」

「凄いですね」

「ヴィルの特長は加工しやすいことね。物質の運動を促進することでヴィルを火という現象に変えたり、逆に運動を抑制して水分を氷に変えたりするの。便利よ」

「ユノみたいに仲間にあげることは？」

「できないわ。また、ユノみたいに切ったり貼ったりが自由じゃないから、さっきの光線みたいに加工しないで直接ぶつけることもできないの」

「加工が義務なんですね」

「そう、加工しないと体外に出せないのよ。

ヴィルは頭を使うと減るわ。減るとイライラするし、集中力が途切れるの。栄養と休養で回復するわ。

魔法の使いすぎでゼロになると死んでしまうの」

「もう1つがノアでしたっけ」

「そうね。ノアは運動能力に関わるの。スポーツや格闘をすると鍛えられるわ。

また、精神を安定させる効果もあるの。ノアが減ると精神が不安定になるわ。なくなると死んでしまうの」

「ノアも光線を出したり魔法になったりするんですか」

「ならないわ。ノアは変形も加工もしにくい。体外に出すのも難しいわ」

「じゃあどんな能力になるんですか」

「身体能力が飛躍的に上がることかな」

すると先生は木に近寄った。ふーっと息を吐いて呼吸と姿勢を整えると、徐々に先生の体が薄い緑色の光のベールに包まれていく。そのまま先生は右脚で蹴りを放った。木に当たると木が折れて薙ぎ倒れていった。

「あ、先生、いけないんだ」と笑うリディア。彼女はこの光景を異常だとは感じないようだが、自然破壊は良くないという常識は共有しているようだ。

先生は「授業だからね」とはにかむ。

「今のがノアの力ですか」

「そうよ、ジャンプ力とかも飛躍的にあがるわ」と言うと先生はひょいと4メートルほど跳びあがった。

「うわ、凄い。飛んでるみたいですよ！」

「飛ぶ？あぁ、飛ぶ方が簡単かもね」

「え？飛べるんですか？」

するとリディアが本当に人間かという疑いの目で見てきた。どうも俺は根本的なことまで忘れてしまっているらしい。

「飛ぶときはユノを使うの。ユノを爆発的に生じさせることで浮力を得るのよ」

そういうと先生の周りに青い炎が起こり、埃が舞った。かと思うと先生は凄い勢いで空中に飛んでいった。

「わぁ！」としか言いようがなかった。先生は空を飛んでいた。前後左右に自由自在に飛ぶと、地面に降りてきた。

「気持ちよさそうですね」

「疲れるわよ？」

「そ、そうですか……」

「それに案外自由に飛べないのよ」とリディア「私が下手だからかもしれないけど、ユノを出して推進力を得るから、ユノを消した途端落ちちゃうの。飛び続けるにはユノを燃やし続けるといけないの。」

でも加減が難しいから、燃やしすぎてぴゅーっと飛んでいっちゃったり、足りなくて出して止めて出して止めてっていうやり方になってカクカクした動きになっちゃったりね」

「ふうん、難しいんだな」

「綺麗に飛べる人はスポーツ選手よ」

なるほど、ここではそういうスポーツがあるのか。

「とまあ、ヴィード講習はこのくらいかしらね」

「はい、ありがとうございました」

「セレン君は何が得意かしらね。人によって才能は異なるわ」

「あ、先生、私、セレン君はユノだと思うよ。昨日カイラを倒したときもユノで倒したの。凄かったのよ」

「カイラを？この年で？」驚いた顔の先生。

「そうよ、私がカイラに襲われていたところをセレン君が助けてくれたの。命の恩人なのよ。」

だから私、セレン君がヴィードを知らないって聞いて驚いたの。信じられないわ」

「そんなこと言われても覚えてないしなあ」

「そうだ、あの紋章と関係があるのかも」

「紋章って？」

「セレン君がカイラを倒したとき、紋章が額に出たよ。こんなの」

リディアは先生から棒を借りると俺の額に出たという幻字を書いた。

「これは……」先生は一瞬押し黙る「ルシーラの字ね」

「そうそう、ルシーラが額に出たの。ふしぎ。」

きっとこのルシーラの字がセレン君の名前なんだね。ルシーラと書いてセレンと読むの」

「そうなのかなあ」

「そうだよ」とはしゃぐリディア。何だか楽しそう。少し笑顔が出てきたみたいでほっとした。

先生はヴィードの授業を終えると、学校の勉強を教えてくれた。日が暮れた後は、3人で夕飯を食べた。先生はリディアの家でシチューを作ってくれた。おいしくて温かった。リディアはそれを食べたらえぐえぐ泣いてしまった。

先生がシチューを作ってくれたのはリディアの祝いでもある。今日はリディアの誕生日だそう。こんな初夏の何でもない日に誕生日を迎えたわけだが、親を失った翌日が誕生日だというのは不幸なことだ。

年齢に比べて随分背が高いんだなと思った。同い年かと思っていた。

「リディア、hacka」と言ったら嬉しそうにしていた。でも、親のことを思い出して寂しそ

うにもしていた。

先生は明日から学校に来たほうが良いと言った。俺もリディアも行くことにした。

リディアは先生に帰らないでと泣きついた。先生はその日泊まっていくことになり、リディアと一緒に寝た。

俺は一人の部屋で天井を見ながら、悪夢を見ないことを祈っていた。何となく今日は大丈夫な気がする。先生のシチューが温かったから、心まで温まって勇気付けられた気がして……。

<天雷のオヴィ>

mel 2 zan zan

朝起きたらリーザ先生の姿はなかった。先に学校に行ったらしい。居間にいったらリディアが朝食を作っていた。

朝食を食べるとリディアは革の鞆を出してきた。1つ俺にくれた。緑がかった灰色の肩掛け鞆で、牛の革でできているらしい。

リディアは学校で使う教材を鞆につめた。俺は空のまま肩にかけた。

水筒に水を入れた。木を割り貫いて作った水筒だ。蓋も木を嵌めるだけなので、あまり揺らすと中身が漏れてしまう。

靴は俺が始めから履いていた革製のものだ。

「剣はどうしょうか」

「持ってくよ、危ないから」

「??」

持っているから危ないんじゃないくて？

「かえって危なくないか？」

「アデルが来たらどうするの？」

「……そうか」

ここはそういう国だった。

ソードベルトを腰に巻き、剣を差す。

「リディアは武器を持たないの？」

「持つよ。私は剣は苦手だからこれ」と言って杖を出してきた。棒というかロッドというか、木製のものだ。先っぽが丸まって太くなっているだけの杖だ。長さは1メルフイくらい。硬そう。殴ったら痛そう。

「昔からこの国の人は武器を持って歩いてたの？」

「アデルが出るようになってからはね」

「学校は1人で通うの？アデルが出るなら大人と一緒にじゃないと」

「大人は仕事で忙しいわ。子供は多くないし家が遠いから一緒に登校するのは難しいの」

「危なくない？」

「でもアデルは滅多にでないから」

家を出る。鍵はかけない。

「鍵はかけないの？」

「この村には泥棒なんていないもん。よその村の人も来ないし。それに盗るものもないからね」

川沿いに歩き出す。昨日先生が蹴り倒した木がそのまま寝転んでいた。

「アデルが出たらどうなるの？」

「戦うよ」

「負けたら？」

「殺される」

平気な顔で言うリディア。俺は寒気を覚えた。

「でもさ、アデルって何でいるの？」

ため息をつくりディア。

「勉強しなかったの？それとも忘れちゃったの？」

アデルはチームスのこけら。宇宙にいるチームスからぼろぼろ零れてくるの」

「チームス？」

なんだか夢で見たような。そして夢の中ではあたかもそれが常識だったような。

「悪魔チームスよ。

エルトの一族とサールの一族、そして私たちユーマの一族がこの世にいるでしょ？それとともにチームスもいるのよ。私たちユーマの一族が生まれたせいで世界が歪んでチームスは生まれた。

チームスは悪魔の母。次々と悪魔の一族を生んだ。悪魔ヴァルテ、悪魔フレスティア、悪魔キルティクノ……」

「たくさんいるんだな」

「悪魔は神々、つまりエルトの一族とサールの一族に戦いを挑んだの」

「勝ったのは？」

「神々よ」

「じゃあなんでチームスが今も生きてるの？」

「神々はチームスを封印することしかできなかったから。そして封印が解けてしまったの。封印が解けたのは2回。始めのときはユーマの一族が封じ込めた」

「それって誰？」

「英雄アルシェらよ。昔の話。でも彼らの封印は応急処置だったから、すぐに解けてしまった。それが現在よ。

封印が解けたせいでチームスのこけらであるアデルが湧いてくる。運の悪い時代に生まれたのね、私たち」

俺は俯いて考え込んでしまった。

「じゃあ、今度は誰がチームスを封印するんだ？」

「分からない……誰も倒せないかもしれない。アルシェたちの時代ほど私たちはヴィードを持っていないから」

「じゃあ、このまま好き勝手殺されてしまうのか？」

「……かもしれない」リディアは立ち止まって空を見上げた「……私に力があつたらなあ……」

少ししてまた歩き出した。道は長い。

「アデルはどうして人間を襲うんだ？」

「この星アトラスにはびこっている私たちを追い出して自分たちの土地にしたいからだと思うよ」

「そうか、じゃあ人間とチームスの戦いは領土争いか。だとしたらなんでサブリが襲われたんだらう。もっと大きな街を狙うはずじゃないのか」

「ふしぎだね。村人も自分たちが襲われるなんて考えてなかったみたいよ。もちろん私も」

「ふうむ。ところでチームスに降参するっていう手はないのか」

「一時しのぎだよ、そんなの」

「そうかな？」

「そうだよ。だって、こう考えてみたら？」

まずサブリを渡しました。今度はチームスはアシェルフィがほしいと言いました。私たちは追い出されてアルナへ行きました。今度はアルナをくれと言われました。そうやっていったら私たちは最後は星の外まで追い出されちゃうよ。そしたらどうなる？」

「とりあえず息ができないな」

「でしょお？」

「戦って勝たないかぎりには死か……」

「うん……」と言いながらリディアはおなかを押さえた。

「どうしたの？」

「……考えたらおなかが痛くなったの」

そうか、やはりこの状況に慣れているリディアでも怖いのか。

1時間歩いても学校には着かない。

「学校遠いね。この村はこんなに広いの？」

「え？サブリはもうとっくに出了よ。サブリに学校はないの。アシェルフィの小学校に行くのよ、私たち」

そうだったのか。

しばらく歩くとアシェルフィという街に入った。学校はアシェルフィの南西部にあるらしい。サブリはそもそもアシェルフィの西側だから、アシェルフィの施設の中では学校は

比較的近い建物だ。

中に入り、教室へ向かう。学校の中は人がたくさんいた。全員子供だ。俺が見慣れないのは全員が武器を持っていることだ。

「おはよう」と言ってリディアが入っていくと、女の子が寄ってきた。

「おはよう、リディア。一昨日の火事は大変だったね」

「うん、ありがとう。もう大丈夫よ」

「その子は誰？」

「セレン君っていうのよ。どこか外国から来た男の子。アデルに襲われた私を助けてくれたの」

「へえ～」と言いながら女子が集まってくる。物珍しそうにこっちを見てくる。女子はどこでも好奇心旺盛でかましい。

質問攻めにあったが、記憶がないということで流した。俺はあまり愛想がないが、この女子はそういうのを気にしないようだ。あと、感情を言葉に出すのが得意なようだ。

余っている机を使っていいよと女の子が言ってくれて、座った。リーザ先生が来るまでの間、そうして女子とずっと話していた。というよりは話しかけられていた。

男子はちらちらと見てくるが、こそこそ何かを話す程度で、話しかけてはこなかった。

先生が来ると女子は散っていった。大人しく着席する生徒。男子も話をやめる。

リディアは去り際、にこにこしながら女子を数人指さして、「あの子とあの子が貴方のこと好きだって」と言ってきた。俺は気まずくて黙っていた。

授業の前に自己紹介をした。

数学の授業を受けた後は休み時間となった。先生が教室を去ると大柄な少年が声をかけてきた。

「おい、転校生」

なにやら友好的な雰囲気ではない。

「お前、アデルだろ」

「は？」

「あの日、俺らの村が焼かれた。お前が来たのもその日だ。リディアを助けたとか言うてるが、実はスパイなんだろ」

「何言ってるんだ、お前」

「そうよ」とリディアが立ち上がる「オヴィ君、馬鹿なこと言わないで。セレン君は命の恩人なのよ」

「信じられねえな。おい、表出ろ」

肩をどんと突き飛ばしてくる。なんだコイツは。どこの国にもこういうのがいるもんなんだな。

「分かったよ」

内心かなりビビっていたが、承諾した。どうにか口で誤魔化せないかとか、先生が来ないかと思えたが、うまく行きそうにない。かといって女子の前でみっともない姿を見せるのは嫌だ。

オヴィに連れられて校庭に出ると、クラスの連中が見物に来た。オヴィは背中に斧をしよってきた。俺は剣を差している。だけど――

「あのさ、いくらなんでも武器は使わないよな」

「使うに決まってるだろ」

この国の連中はなぜこんなにも命をあっさり投げ出そうとするのだろう。

「ケンカで人殺しはやりすぎだろ」

「お前はアデルだ。村を焼いた。許せねえ」

「だから俺は違うって」と言っているのにオヴィはユノを燃やし、突進してきた。動きが速い。

俺も咄嗟にユノを燃やした。昨日先生の授業を受けておいてよかった。

拳打を浴びせてくるオヴィ。ストレートを左手でパリーすると反射的にカウンターを返した。オヴィの顎のところで俺の拳が青く光る。バシッと光が弾けると、オヴィはたたらを踏んだ。

「な、なんだ今の!？」

驚く俺を不思議そうに見るオヴィ。

「何言ってやがる」

「今なんで手が光ったんだ？」

「……はあ？」

首を捻るオヴィ。すぐ顔色を戻すと斧を取り出す。俺は気を取り直して剣を抜く。

今、俺の拳があいつに当たった瞬間光った。どちらかという接触面が光った感じだった。オヴィの顔を見る。結構な威力で当たったのに血が出ていない。唇も切っていない。何より痛そうに見えない。

「あのさ、答えてくれなそうだけど、お前殴られたのに痛くないの？」

「……ユノでガードしたから当然だろ」唸るような声。

ユノでガード? そうか、ユノは盾としても使えるのか。ユノを燃やしている間はユノが盾になるので、体はダメージを受けないということか。なるほど。

と思っている間にオヴィが斧を振りかぶってきた。避けようとしたが脚がすくんでしまった。思えば当たり前だ。だって俺の人生では、迷うことなく斧で切りかかられたことなんかはない。

とっさに剣でガードした。ガンとぶつかる。すると剣と斧の接触面でユノが散った。まるで青い火花だ。その瞬間、わずかにぐらっと体の力が抜けるのを感じた。俺は追撃を避

けるために後ろに跳んだ。

そうか、今のぐらっという感覚がユノを失った感覚なのか……。盾に使ったのでユノを大量に消費した。なるほど。そしてユノがなくなると死ぬわけか。きっと最後の方は盾も作れず、純粋に刃物で切られたように死んでしまうのだろうか。

オヴィは跳んで俺を追いかける。あまりに速いので対処できなかった。子供の跳躍力とは思えない。

そうか、ユノを燃やして飛ぶのと同じ要領だ。今回は推進力として跳躍に使ったんだ。そう理解した瞬間、拳が顔にめり込んだ。

目の前でユノがはじけ飛ぶ。ユノで守っているにせよ、痛い。衝撃はそれなりに伝わるようだ。だがまともに食らったら歯が折れていただろう。ちょっと痛い程度では済まなかったはずだ。

なるほどね、ユノで守っても体に攻撃を食らえばそれなりには痛いということか。

俺はオヴィの腕を取り、近接で前蹴りを放った。肋骨を狙う。オヴィは蹴りを食らって軽く沈む。そのまま右腕で顔を殴ると、オヴィは後ろによろめいた。

「beo!」と叫ぶとオヴィの身体は赤く光った。

魔法も使えるのか……！

「ire, vand-ac la!」

オヴィの叫びに呼応して、落雷が起こった。青い閃光が雷鳴とともに起こり、俺の剣に落ちる。

どうも物理攻撃と同じく、魔法もユノで防ぐらしい。俺は全身が痺れるのを感じ、剣を手放した。もしユノがなくまともに食らっていたら丸こげだったろう。

立ったまま失神しそうだった。オヴィが斧を構えて飛び込んでくる。ふっと意識が遠のきそうになりながら、俺は前進した。

ユノで攻撃を防げるということは……。

ガンッとユノが弾けた。オヴィは驚愕の表情で俺を見る。俺は素手で斧を止めていた。

そう、ユノで防げるなら刃物だって素手で止めればいい。刃面を受けたのでユノを急激に消費してしまったが、しょうがない。

僅かにできた隙。俺はすかさず右ストレートを入れた。オヴィは吹っ飛んで倒れていった。

剣を拾うと、俺はすっと近寄る。

「この国では戦って勝てなければ死ぬんだっつよな、リディア」

呟きながら剣を振り上げる。オヴィは動かない。

横から声が入ってきた。

「そうね、もしあなたがアデルだったらけど」

振り向いたらリーザ先生が立っていた。

俺はユノを解いて剣を収めた。そのままリーザ先生の横を通りすぎた。

「売られた喧嘩を買ったんです」

そのまま教室へ歩いていった。先生は振り向かずに応えた。

「オヴィ君は自分の正義で動いていたの。彼を理解してあげられる？」

俺は無言で頷いた。

「セレン君！」

リディアが近寄ってきた。

「大丈夫だった！？」

「あいつの天雷……」俺は右手を差し出した。震えている「……凄かったな。まだ痺れが取れない」

本当はビビってるからなんだけど、女の子の前だから強がりを吐いた。

<甲冑ヴァーナ>

mel 3

アシェルフィの小学校にも徐々に馴染んできた。クラスにも馴染んできたし、授業にも付いていけている。

俺は行く宛がないので結局リディアの家に住んでいる。リディアは寂しがって一緒にいてほしいというので、かえって居候する理由ができて助かっている。

転校早々ケンカをしたオヴィとはあれ以来かえって仲良くなってしまった。向こうは俺に対するアデル疑惑を解いて、真正面から謝ってきた。話してみると結構気が合うということが分かり、それからよく一緒にいるようになった。

リディアは女子といることも多かったが、俺と一緒にいることも多かった。だから 3 人でよくつるんでいた。

だが、一向に俺の素性は分からなかった。

それでもこの国での生活も悪くないなと思い始めていた。

そんな風に考えていたときだった。

今日もいつもどおりの授業だ。平穏無事で、この世界がアデルの脅威にさらされていることを忘れてしまうくらいだ。

教室で窓の外をふと見たら、何だか空が暗かった。

雨でも降るのかと思ってみていたら、やがて音がした。

はじめは雑音でしかなかった。何だか虫の飛ぶような音。それがだんだん大きくなってきた。そして窓の向こうに何かが見え出した。

なんだろう……。目を凝らしてみる。何か大きなものが飛んでくる。乗り物が空を飛んでいるかのようだ。音はだんだん大きくなる。この音はプロペラか何かの音のようだ。やがて校舎が揺れる。

「飛空艇だ！」

オヴィが外に気付いて声をあげた。

飛空艇……？あの戦艦のことか。空飛ぶ船、飛空艇か。なんだってこんなところに？

「凄いなあ、空を飛んでる。アルバザードの科学力は凄いな」

横の席に座っている赤毛の可愛い少女ファミイに言うが、彼女は青ざめた顔で首を振った。

「セレンさん、あれはアルバザードの船じゃないです」

「え？」

飛空艇は校庭の上で停止した。中から誰かが空を飛んで出てきた。

その男は鎧に身を包んでいた。全身甲冑づくめで、顔が見えない。

「何だ、あいつ……」思わず立ち上がる皆。先生も眉を顰めて見ている。

甲冑の男は俺たちのクラスの前で浮遊していた。なんでウチのクラスに……？

男は両腕から大きな剣をぶら下げていた。キラッと男の剣が光ったかと思うと、パンと音がして窓が吹き飛んだ。俺は咄嗟にファミイちゃんを守って抱きかかえた。

「あ、ありがとう、セレンさん。大丈夫ですか？」

「怪我はない？」

「はい……」

周りを見ると皆とっさにユノでガードしたか、あるいは友達に守ってもらっていた。リディアを見ると、どうも動きがトロい上に誰にも守ってもらえなかったらしく、腕にガラスの破片が刺さって出血していた。

「リディア！」

かけよって肩を抱く。リディアは声を出さずにえぐえぐ泣きながら、自分の腕に刺さったガラス片を引き抜いていた。

この野郎と思い、男を睨む。すると男は俺を見ていた。俺が睨むより先に俺を見ていた。まさか……俺に用があるのか？なんだか嫌な予感がする。いい予感がするはずもない。

「お前がセレンか」

名指した。全員の顔がこちらに向く。なんて迷惑な奴だ。名指しされたら今リディアが怪我をしたのも窓が割れたのも間接的に俺のせいになるだろ。みんなにも迷惑がかかる。せっかく築いた居やすい空間を壊すのは勘弁してくれ。

「そうだけど、あんたは？」

「私は——」

「ヴァーナ！」

リディアが叫んだ。

「知ってるのか？」

「違うわ、ヴァーナ（臆病者）よ！この時代に鎧なんか着て！」

「ふっ」と男は笑った「好きに呼ぶがいい」

「で、そのヴァーナは何をしにきたんだ？」

「宣告だ」

「宣告？」

「アデルにも対抗できないアルバ王にこのアルバザードを任せるわけにはゆかぬ。

この国は私がもらう」

「あらそう」とリーザ先生「じゃあ役所に行って申請してくださいな。ここは公共機関だけど、お役所じゃあないのよ」くすくす笑う。

「お嬢さん、国盗りにはこの少年が邪魔なのですよ」俺を指すヴァーナ。

「俺が？それ、どういう意味だよ。お前、俺のことを知っているのか？じゃあ教えてくれ。俺は誰なんだ」

「それが分かる前にお前は死んでいるさ。お前の同居人もろともな」

ヴァーナは大剣を光らせた。

「付いて来い、セレン。この学校も含め、この国はいずれ私の領土になる。無駄に破壊したくはない」

「行くわけないだろ。質問に先に答えろ」ジャキッと剣を構える。

「状況が飲み込めていないようだな。では——」

ヴヴッと空気が揺れたかのような感覚がした。ヴァーナの影が揺らいたような気がしたのだ。すると次の瞬間、ヴァーナは俺の後ろ、ファミイちゃんの横に来ていた。

「なっ！」驚いて振り向く俺。

「——この少女の腹を割こうか。はらわたを食わせてやる。そうすればお前の態度も改まるだろう*1」

大剣をファミイちゃんのへそにあてがう。彼女は突然の恐怖に目を丸くした。額に汗をかき、桃色の唇を開いて、はあはあと息を吐く。見る間に白いシャツの首周りが汗で濡れていく。

「やめろ。分かった。付いていくから」

するとヴァーナは剣を解き、窓の外へ飛んでいった。

「ファミイちゃん、ごめん。怖かったね」

恐怖が解けて泣き出した彼女の頭を撫でると、彼女は頷いた。

俺もユノを燃やして飛んでいく。最近ようやく飛べるようになったばかりだ。

「待って、セレン君！私も行く！」

リディアが飛んできた。オヴィも付いてくる。

「生徒を放っておくわけにはいかないわね」と先生も付いてくる。

ヴァーナは飛空艇に乗り込む。

「セレン、どうした？乗れ。どうせ後を飛んでついてくるのだろう？無駄な体力を使うな」

ヴァーナに言われ、少し迷ったが乗り込むことにした。甲板に降り立つ4人。ヴァーナと対峙する。

やがて飛空艇が発進し、人里離れた平原の方へ飛んでいく。

「先生、警察には連絡しないんですか？」

「警察じゃ勝てないわよ。アルバ王直参の防衛部隊がいれば別なんでしょうけどね」

「防衛部隊？」

「国家特殊防衛部隊ヴァノアルバ。厳選された戦士たちよ。アルバザードの軍隊より強力だわ」

「じゃあその人たちに連絡を！」

「無理よ、彼らは今総出でチームスの復活を遅らせているからね」

「復活を遅らせる？チームスの封印は解けたんじゃ」

「厳密にはまだ眠っているわ。ギリギリのところで復活を遅らせているのがヴァノアルバなの。彼らのおかげでアデルも大した強さのものは降ってこない。

　　だけど、その仕事のせいで彼らは本来の業務である国の防衛に当たれなくなっているの」

「それでヴァーナみたいな反乱分子が現れるってわけですね」

「そう、防衛部隊の苦勞も知らないで自分が王になれると思っているような輩がね」

　　チラと周りを見る。飛空艇を操縦している奴らが甲板にもたむろしていた。

　　そこに人の姿はない。全員アデルだ。アデルは無言で睨みつけてきた。

　　広い平原で飛空艇が止まった。空中に浮いたままの姿勢を保つ。

「降りろ」ヴァーナが指示する。大人しく従って降りた。

「前触れもなく学校に来て「さあ勝負だ」っていうのは納得がいかないな。俺を襲う理由を教えてくれ」

「いいだろう。なぜならば、アルバザード征服にお前が邪魔だからだ、セレン」

「俺はただの子供だろう？防衛部隊ヴァノアルバが邪魔だっていうなら分かる。でも俺が邪魔だっていうのは理解できない。俺の過去を知っているのか？俺は過去に何があったんだ？」

　　するとヴァーナは大剣を構えた。

「お前が勝てば私の知るところを教えてやろう」

「へえ」とリーザ先生が長い金属のロッドを手に詰め寄る「あなた、子供相手に鎧を着て大剣を振るうのね」くすくす笑う。

「むろん、全員でかかってくるがいい」

　　ヴァーナは大剣を天空に刺した。雷が巻き起こり、剣に帯電する。自分の魔法だから、感電はしないようだ。

　　そのまま俺に突っ込んでくる。慌てて剣で受けてしまった。これがよくなかった。帯電した電気が剣を伝って俺に流れ込んできた。相手の魔法なので俺には有効なのだ。

　　体が痺れる。そこをヴァーナが剣で薙いできた。胸にガンと当たる感触がし、ユノが弾けとんだ。

　　猛攻だ。俺は戦闘経験が少ないから対処できない。されるがままだ。まずい、体勢を整

えないと。

「ketta, vext! efop!」リディアが氷の魔法を唱えると、大剣が見る間に凍っていった。純粹な水は絶縁体だ。帯電した魔法剣が威力を失う。咄嗟に俺はヴァーナを斬り付けた。ヴァーナは斬られて後方に大きく跳び、間合いを取った。

ヴァーナは急に電気を失った剣を見て驚き、リディアを見やった。

「こどものお前がなぜこんな芸当を……」

「電気は凍らせれば通らないでしょ！せんせーに習ったもん！」

思わずリーザ先生を見るヴァーナ。

「この子、魔法はからきしだけど、魔法の知識は凄いのよねえ」

「せんせー、余計なこと言わないで！」棒でガツガツ地面を叩くリディア。

「今度はお前が雷を食らえ」

言うが早いかオヴィは斧に帯電させた。そして大きな斧をヴァーナに投げつけた。オヴィが飛び込んでくるものだと思っていたヴァーナは斧を避けられず、正面から食らった。

声をあげるとヴァーナは斧を拾って投げ返した。ところがオヴィは慣れた手つきで斧の柄を取ってしまった。ヴィードがあるからとはいえ、物凄い運動神経と握力だ。

「へへ、どうだ」オヴィは斧を振りかざして飛び込む「ご返却ありがとうございます——ってな！」

ヴァーナは斧を剣で受けるが、感電して身動きが取れなくなる。オヴィはそこに拳打を浴びせた。

「生意気な！」ヴァーナは炎を出すと、俺たち全員に投げつけた。とっさに避けたら平原が丸く燃えてしまい、あっさり火の海に包まれてしまった。火は物凄い勢いで迫ってくる。

「esk!」先生が魔法を唱えると豪雨が振り出し、火の海を消した。

が、火が消えたと思ったらリディアの悲鳴が聞こえた。見るとリディアの身体は宙に浮いていた。ヴァーナに首を絞められ、持ち上げられている。

そんな馬鹿な。ヴァーナはいつの間に火の輪の中に入ったんだ？このタイミングだと、火の輪が消える前に中にいたとしか思えない。

俺たちの周りは火の海だった。ヴァーナは外側にいた。なのにどうやって先生が雨で消す前に火の内側に入ってきたんだ？

「甲冑……」俺は呟いた。そうだ、甲冑を着たヴァーナは悠然と火の海を渡ってきたのだ。俺たちの目をかいくぐって。火は囷だったのか。

「リディア！」

リディアは呼吸ができず、脚をばたつかせている。必死にヴァーナの手を解こうとする

が、引っかくくらいの抵抗しかできない。だが、甲冑相手に引っかいたところで何にもならない。

苦しそうなリディアの顔を見ていたら、ふいに俺の意識が遠のき、体の芯が安定したような錯覚に陥った。

それとともに額にルシーラの文字が浮かびあがった。

すると、俺の体から突然莫大な量のヴィードがあふれ出した。ユノを爆発させると、俺は素手でヴァーナに飛び込んだ。振り向くヴァーナの顔面に裸拳を叩き込む。拳が緑に光った。ノアの力だ。

俺の拳はヴァーナのユノを貫き、甲冑をも貫いた。顔面を潰され、ヴァーナは叫び声をあげる。

甲冑の顔の部分崩れる。するとヴァーナはハッとして手で顔面を覆った。その瞬間、リディアが空中から解き放たれて地面にドサッと落ちる。

「お、おのれ……」ヴァーナは片手で剣を振るう。

俺はユノを撃とうとしたが、今ので急激に力を使ってしまい、足元がふらふらしてしまった。ダメだ、動けない。しかも意識が朦朧としてきた。

そのとき、地面に倒れたリディアがキッとヴァーナを睨んだ。

「鎧なんかで守ってばかりのくせに、何がアルバザードを征服する、よ」

そして、叫んだ。

「よわむし！」

リディアの体から赤い炎が湧き起こる。ヴィルの炎だ。そして彼女の額も光を放った。あれは……幻字だ。見慣れぬ幻字。まるで夢の dia をもじったような字……あれが、リディアの字？リディアの額にも文字が……？遠のく意識の中でリディアの文字に目が行った。

「ketta, saar astel！」

よく響くリディアの甲高い声。赤い炎は稲妻のように地へ降り注ぎ、大地を割った。その中から塔ほども身の丈があるのではないかという巨人が現れた。

「なっ……！」固まるヴァーナ「馬鹿な！アステル神を召喚したというのか！！」

巨人アステルは大地を踏み鳴らした。地面が揺れる。皆大慌てで宙に浮いて震災を逃れる。だがヴァーナはアステル神の放つ強力な重圧で空に飛べなかった。ヴァーナは大地に揺られ、地割れに飲み込まれた。

ヴァーナが地割れから這い上がってくるとアステルは渾身の力でヴァーナを踏みつけ、殴り飛ばした。ヴァーナは宙に上げられ、飛空艇の底を突き破って甲板まで跳ね上げられた。

それを見届けるとアステルは地割れの中に帰っていった。

これが先生の言っていた神を呼ぶ召喚魔法……。なんという威力だ。

先生はさっきリディアが魔法はからきしと言っていたが、あの言葉は嘘なのか？

俺たちは甲板に飛んでいった。ヴァーナがよろよろと起き上がる。

「おい、まだやるのか？俺たちの勝ちだろ。俺について知ってるかぎり教えてくれるんだったよな」

「そうだな、今回はお前たちの勝ちのようだ。約束どおり教えてやろう。」

セレン、お前の過去と未来は……この国と世界に関係している」

「この世界に？」

「かつて神々が封じた悪魔チームス。そのチームスが復活したとき、かの英雄アルシェらが再度封印したことは知っているな？」

「……？」

オヴィ「ああ……。だがその封印さえも現代で解けかかっている。だからアデルが湧いた。そして、そのチームスの復活をギリギリのところで食い止めてるのが、ヴァノアルバの人たちだろ？」

「そうだ。それで、セレン、お前は人間がチームスに勝てると思うか？」

「さあ。でも負ければ殺されるとリディアが教えてくれた。戦うしかないだろう」

「本当にそうかな。私は違う。私は悪魔と同盟を結ぶ。ヴァノアルバの留守は好都合だ。私はアルバザードを征服する。そして悪魔がアトラスを支配した暁には、アルバザードの軍事力を盾に独立主権国家を維持する。ヴァノアルバがいれば国の防衛には十分だ。それがアルバザードを悪魔から守る私の方法だ」

「なるほどな……お前の理念は分かった。だが俺と何の関係がある」

「お前はチームスと戦うべくして生まれた人間だ。その額の紋章が何よりの証。額に紋章の浮かぶ子供たちは皆、英雄アルシェらの末裔だ」

「なんだって！？」

俺とリディアは顔を合わせる。

「末裔……？じゃあ俺とリディアは兄弟なのか？」

「そうではない。血の繋がった末裔ではなく、運命で結ばれた使徒同士なのだ」

「運命……」事情がすぐには飲み込めない「もしお前が正しいとして、俺やリディアがチームスを倒す使徒だとしたら、その何が悪い？お前も俺たちの味方をすればいいだろう」

「ふっ」ヴァーナは剣を支えにして立ち上がる「それが甘いというのだ。勝てる見込みがどこにある。負ければ全員犬死にだ。ならば国だけはせめて守るのが筋だ」

「負けると決め付けるなよ。チームスを倒すために俺やリディアは生まれたんだって、運命とやらが言ってるんだろ？」

「お前こそ、うぬぼれすぎだ。悪魔の力は強い。お前にあの山が崩せるか？テージュ海の水面を2つに割って、海底を曝け出させることができるか？あの青い空を破ることができるか？」

るか？自分の同居人の少女1人守りきることが、お前にできるのか！」

ぐっと言葉に詰まった。

「使徒らよ、戦うために生まれたことと勝てることは別物だ。お前たちは破滅の使徒だ。チームスに余計な挑戦をし、アルバザードに危機をもたらす。そうなる前に私は芽を摘んでおかねばならない」

何も言い返せない。悔しい気持ちばかりが残る。なんだ、その俺が悪だというような言い方は。俺は自分が何らかの運命を背負っていることを知ったショックでそれどころじゃないんだ。頭の中を整理しないととてもやってられない。

「じゃあ……」ゆっくり口を開いた「じゃあ俺にどうしろっていうんだ？戦わずして逃げろっていうのか？お前のやり方でアルバザードは救われるかもしれない。だけどお前が困る世界の外側はどうなる？」

「そうよ！」リディアが叫ぶ「アルバザードだけを守るならメテヤルティアはどうなるの？アルバザードだって全土を守れるの！？どうせ首都アルナだけじゃないの？アシェルフィはどうなるの？サブリは？」

「それに俺は」オヴィが続ける「そもそも悪魔が自治権をくれるなんて思えねえな。結局攻め込まれ続けて、いつかやられるぜ」

「もっともだ」と俺。

「説伏は無理のようだな」

ヴァーナは右手をかざした。急に物凄い風圧に押され、俺たちは甲板から弾き飛ばされた。

「使徒らよ、ならば私を止めてみよ。チームスに挑む前に、私を倒すのだな。私はお前たちを付け狙う。この国の命運を剣で決めようではないか」

そう言い残すとヴァーナは飛空艇とともに去っていった。

*1：アンティスでは感情の一部、とりわけ恐怖やストレスは腸に宿るとされている。セレンの恐れを知らない態度に業を煮やしたヴァーナは、怖がっている少女ファミイの腸を食わせようとした。

<疾風のクリス>

mel 4 axte

かつて、カコという時代に復活したチームスを封印した英雄アルシェ。
それから 1600 年ほどの月日が流れ、今またチームスが復活しようとしている。
その現代にアルシェの末裔たちが現れた。

.....だがそれが自分だなんて考えられるか？
信じられない。
だけど、運命はそうだと知っている。

復活しようとするチームス。それを食い止める国家防衛部隊ヴァノアルバ。
その横で、チームスに乗じてアルバザードを奪取せんとする甲冑ヴァーナ。
ヴァーナにとってチームスと交戦をする俺たちアルシェの末裔は邪魔でしかなかった。
ヴァーナは予告どおり、俺たちを付け狙った。何度か交戦をしたが痛み分けで、決着は
付かなかった。

リーザ先生は俺たちにほかのアルシェの使徒を探すように命じた。ヴァーナに対抗しな
ければならないし、チームスとの交戦に備えて仲間を集めておかねばならないからだ。

アルシェの使徒はみな額に幻字が浮かぶ。幻字が浮かぶとヴィードの量が増えるという
特長を持っている。

幻字は緊急事態に陥ると出るようだ。怒りや悲しみなど、強い感情が紋章を浮かびださ
せる。

俺もそうだし、リディアもそうだ。そしてオヴィもそうであったということを知った。
彼も使徒だった。

どうも使徒は互いに惹かれあうらしい。だからきっとほかの使徒もそう遠くないところ
に潜んでいるはずだと考えた。

俺たちがアルシェの末裔だとしたら、きっと末裔たちは同じくらいの年に生まれている
はずだ。バラバラに生まれてくる意味はない。

だから、きっと使徒はまだ俺と同じ子供に違いない。リディアと初めて会ったのが 10 歳
のとき。今はもう 12 歳だ。きっとほかの使徒も 12 歳くらいの子供だろう。

子供の感情は振幅が激しい。きっと、ふとしたことで紋章を出しているのではないか。
あんな紋章が出れば町のうわさになるに決まっている。

だから、町を転々とすれば、額に紋章が浮かぶ子供と出会えるかもしれないと考えた。安易だが、ほかに方法がなかった。

学校を休み、俺とリディアとオヴィはまずアルバザードを探すことにした。とりあえずは北だ。

サプリの村を出て、アルバザードを通して北へ向かった。すぐ北はソエンの谷だ。この谷を越えないと北へはいけない。

「深い谷だな……」

呟く俺に、2人が頷く。

俺たちはソエンの谷の入口に立っていた。

深い谷だ。そして向こう岸に行くには一度降りなければならない。迂回路はなく、橋もない。

「でも空を飛ぶ要領で降りれば落ちないだろ」とオヴィ。

「そうはいかないみたいよ」とリディア「ソエンの谷越え。ことわざでしょ」

オヴィ「ことわざほど大変かどうか分からんぞ」

「じゃあ巻き込まれてみる？」リディアが指をさす。

見ると、谷間に強風が吹き荒れていた。

「ここは万年、暴風の谷よ。飛んで降りたらてんでこまい」

セレン「……なるほどね。斜面伝いに降りることにしよう」

斜面をゆっくり降りだした。

「案外難なく行くもんだな」と言いかけたところで、ギャーという大きな声が聞こえた。

「まずい！」オヴィが叫ぶ「ヴィクトだ！」

ソエンの谷に入ったところで俺たちはヴィクトに襲われた。強い鳥という意味の魔物だ。青紫と黒の模様が入った大きな鳥で、いかずちを放つ肉食の鳥だ。体は羽を広げると4メートルフィはありそうなほど大きい。

「谷を降りる旅人を狙ってるのよ！」

「こんなところで襲っても悪魔の国盗りにはならないだろ？」

「単なる食事！」

「……。2人とも、武器を取れ！」慌てて剣を抜く「ここじゃ空中戦は無理だ。相手に乗せられて飛ぶなよ！」

オヴィ「かといって近接戦も難しそうだがな。魔法とユノでいくか」

オヴィがお得意の電撃を放つが、ヴィクトは雷に耐性があり、効果がなかった。

「じゃあこれでどうだ！」

オヴィは斧を投げつけるが、ヴィクトは羽ばたきで斧を落としてしまう。

「fai!」リディアが火を放つが風で消されてしまう。

俺はユノを撃つが、すいすいとよけられてしまう。

逆に向こうの攻撃は当たる。大きく旋回して突進してくるヴィクト。大きな嘴で突かれる。切りつけようとするのだが、向こうの攻撃にひるんでしまっただけで切れない。

徐々に嘴でダメージを受けていく。このまま繰り返していたらこちらのユノが尽きる。まずい、非常にまずい。向こうには地の利がありすぎる。せめてこのソエンの風さえなければ……。

そのとき、疾風が吹いた。

どこからともなく起こる一陣の風。

風は刃になると、ヴィクトの体を刻んだ。ヴィクトが悲鳴を上げて旋回する。

そして黒い影がひゅっと現れた。それは人の影だった。遠巻きながら、その額が光っているのが分かった。

黒い影はヴィクトにぶつかった。ヴィクトはさらに悲鳴をあげた。不測の事態に驚いたヴィクトはそのまま逃げ去った。

「な……なんだ？」

「助かったみたい……」リディアが呟いて構えた杖を下ろす。

オヴィ「誰か来るぞ！構えろ！」

谷の斜面を誰かが歩いてくる。あれは……人だ。しかも子供だ。さらにいえば、どうやら女の子のようだ。

「おおい、大丈夫だった？」

その子は金髪に青い眼をした白人の混血少女だった。剣は持たないものの、右手には爪を装着している。どうやら今ヴィクトに突っ込んで行ったのは彼女のようだ。そしてこの爪でヴィクトを刻んだようだ。

「ありがとう。おかげで助かったよ。君は？」

「私はクリス。あんたたちは？」

俺たちはクリスに挨拶した。クリスは気さくな少女で、感じよく返してくれた。

リディア「さっき、ソエンの風が一瞬止んだみたいだったけど」

クリス「私、風を操れるのよ。風の刃を放ったり、風に乗って高速で移動したり、この爪に風刃を付けて敵を刻んだりね」

リディア「かっこいい～」

オヴィ「格闘技が得意なんだな」

クリス「自活してるとアデルと戦うことが多いからね。魔法かユベールが強くなくちゃ生きてけないわ」

オヴィ「女でユベール好きってのは珍しいな」

クリス「そうかもね。多くはないよね。でもあんたも強そうね」

オヴィは「まあな」と言って笑った。

クリス「ねえ、ここは風が強いから、私の家で話でもしようよ」

セレン「君の家？」

「そう、そこにあるのよ」

オヴィ「おい、そこって、ソエンの谷にか？」

「うん、逆に誰もこないから安全でしょう？ここはたまに旅人が通過する程度だからね。でも今日は誰かがヴィクトに狙われてたんで驚いたわ。それで慌てて助けにきたのよ」

クリスは谷底の家に案内してくれた。彼女は一人でここに住んでいて、たまに食料を買いに谷の上にあるザミアの街に出ているらしい。

彼女は谷底の鉢物売って生計を立てているようだ。

「いつから君はここに？」

「さあ。一番古い記憶が既にここだわね」

「いま年齢がいくつ分かる？」

「12くらいかな」

「じゃあ俺やオヴィと同じだね。ところで、クリスは額に紋章が浮かぶことはある？」

俺が尋ねると、クリスは腕を組んだ。

「んー、あるわよ。戦ってるときにたまに。出ると強くなるのよね、一時的に」

「やっぱり！」リディアは嬉しそうな顔をした。そしてクリスに事情を説明した。

「アルシェの末裔……私が？」

クリスは話を聞き終わると、内容をゆっくり咀嚼した。

「で、私はあんたたちの仲間、一緒にヴィクトの親玉のチームスを倒すために生まれてきたっていうのね？」

俺たちは真剣な顔で頷いた。クリスは大きくため息を吐いた。

「そう……。なんだか急な話すぎて何も言えないわ。でも、嘘ではないよね。だけど、ヴィクトよりも強い悪魔と戦うなんて、大丈夫かしら」

リディア「とても不安だよ。でも、私たちが使徒ならやらないと。私たちが戦わないとみんな殺されちゃう。もちろん私たちも」

クリス「そうよね。あんたは正しいわ、リディア。怖いけど戦う。それしかないみたいね。

私も谷底で延々暮らすよりは、花火みたいな生き方をした方がやりがいがあるわ」

「よかった。じゃあ早速だけど、リーザ先生に紹介したいから、サブリへ来てくれないか」

「わかったわ」と言ってクリスは荷物を整理しだした「ねえ、あんたたちとは長い付き合いになりそうね」

「そうだね。まあ仲良くしよう」

「それは——」クリスはかばんをしょった「大丈夫だと思うよ。私、何となくあんたたちのこと気に入ったみたいだから」

<ヴァーナ戦>

mel 4 axtekit

この日、俺たちは学校で授業を受けていた。すると例のごとくヴァーナが飛空艇に乗ってアシェルフィを襲撃してきた。

とはいえ、ヴァーナはこの国を盗る気なので、施設を壊そうという気はないらしい。あくまで狙いは俺たちのようだ。

校庭の上で停止する飛空艇。初めてのことでない。子供たちは始めは怯えていたが、段々慣れてきたようだ。

「アルシェの使徒らよ、今日こそ決着を付けよう」

ヴァーナの声が響く。俺は目配せすると、リディア、オヴィ、クリスが頷いて立ち上がった。

窓を開け、ユノを燃やして浮き上がる。先生をちらっと見ると、教科書を持ったまま無言で頷いた。少し緊張した顔だ。俺は強がりな笑みを見せて窓の外へ飛んだ。

飛空艇の甲板にいくと、ヴァーナがいた。もう夏だというのにあいかわらず甲冑を着ている。暑くないのだろうか。

「ヴァーナ、いい加減お前を取り逃がすのもうんざりだ。今日こそケリを付けよう」

「4人になったからといって威勢がいいものだ」

「いや、むしろ俺たちが強くなったからだ。お前との戦闘やアデルとの戦闘で強くなったよ」

ヴァーナは大剣を振るう。ユノを剣に蓄えて振ると、ユノの刃が飛んできた。全員、両手で受け止める。反射して甲板に弾けたユノのせいで視界が一瞬奪われた。

「リディア！気をつけろ！」

そう叫んだものの、リディアの悲鳴が聞こえた。やはり接近戦では力の弱いものを狙うか。

リディアは片手で持ち上げられ、中吊りになって脚をばたつかせている。ところが彼女も慣れたもので、ヴァーナの顔面に氷の魔法をぶつけた。

「ぐっ」といってヴァーナがよろめくと、リディアは空中で一回転しながらケリを浴びせた。凄い運動神経だ。

すかさずクリスが爪を手に突っ込む。よろめくヴァーナの首に爪を差し込む。

ヴァーナは怒って大剣を振り回す。しまった。調子に乗って2人とも近寄りすぎだ。奴の力はとても強い。子供のリディアやクリスは一薙ぎでユノの大半を奪われて甲板に沈ん

だ。

が、この危機をチャンスに変えたのがオヴィだ。リディアたちがやられている間に近付いていたオヴィは、後ろから雷を纏った斧でヴァーナを切り裂いた。咆哮をあげるヴァーナ。

「よし、もう一発！」

「オヴィ、深追いするな！」

ところがオヴィは聞かずに突っ込む。ヴァーナの手首を斧で打つと、ヴァーナは剣を落とす。

「もらったぜ！」

斧を振り上げるオヴィ。ところがヴァーナはすっと前に入り、空いたオヴィのふところに拳を入れた。オヴィは鳩尾にカウンターを食らい、そのまま声も出さず沈んだ。

「さて、セレン、残るはお前か」

剣を拾うヴァーナ。

俺は倒れた仲間を見て怒りが湧いた。すると額に紋章が浮かび上がった。

「くっ、またそれか。お前たちアルシェの使徒にはそれでほとんど困らされる。紋章が浮かび上がる前に倒すのがベストなのだが」

剣を構えるヴァーナと俺。

同時に駆け出す。剣と剣がぶつかる。だが身長は奴の方が遥かに上だ。力も、剣の重量も。天から重圧をかけるヴァーナに対し、俺は必至に地から這い上がろうとする。

ヴァーナが剣にユノを箆める。

「お前さえいなければ霊界は平穏なのだ、セレン」

俺も剣にユノを箆める。

「ああ、そうかよ。悪魔に国を売り渡してか？」

「そうだ、アルシェの使徒よ。アルバザードも霊界も私が守る。

セレン、お前は帰れ！」

「……帰れ？お前何を言ってるんだ？」

俺が目を細めるとヴァーナはハッとした顔になった。力が一瞬弱まる。

チャンスだ。今が斬るときだ。

「ヴァーナ！滅べ！」

剣を外す。ヴァーナが前につんのめって甲板に剣を振り下ろす。大剣が甲板を砕いて刺さる。俺は剣を振り上げ、ありったけのユノで甲冑を斬り捨てた。

ヴァーナの悲鳴がこだまする。

「馬鹿な、この私が……。くっ、一人では死なんぞ」

ヴァーナはユノを機関部に向けて放った。まずい、自爆する気だ。

俺は残ったわずかなユノを燃やし、倒れた仲間を抱きかかえ、飛空艇から飛び降りた。最後に振り返るとヴァーナが見えた。

ヴァーナの甲冑は割れ、中から素顔が見えた。ヴァーナは絶命の寸前だというのに、俺と目が合うとハッとして顔を隠した。俺は一瞬見えた顔にどこか見覚えがあるような感覚を覚えたが、意識が遠のくほうが早かった。

世界が暗転する中、遠くなった耳で飛空艇の爆発音が聞こえた気がした。

「セレン君！」

目を開けたら学校の保健室だった。リディアの顔がある。よく見るとオヴィとクリス、それに先生もだ。

「ヴァーナは……」

リディア「飛空艇とともに沈んだわ。アルバザードは守られたのよ」

「そうか、俺たちで守ったんだな。よかった。俺、確か空中で意識を失ったんだよな、お前らを抱きかかえたまま」

オヴィ「空中で俺が気付いてな、全員をここまで運んできたんだ」

「そうだったのか。助かったよ」

クリス「ねえ、セレン、ヴァーナは死んだのかしら。ちゃんと爆発に巻き込まれたのよね？」

「ああ、俺は最後の意識で爆発音を聞いた。その直前に甲板のヴァーナを見たよ。甲冑が割れて、素顔が見えた」

リディア「素顔？どんなだった？」

「何となく……どこかで見たことあるような……思い出せないんだが」

リーザ「それより、貴方たちが無事で良かったわ」

「はい。ヴァーナは倒しましたからね、これでアルシェの使徒がチームスと戦う邪魔をする者はいなくなりました」

リーザ「逆に言えばこれがチームスとの戦いの始まりよ」

「はい、分かっています」俺は静かに頷いた。

<第九異性魔王——アシュ>

mel 4 fleakat

ヴァーナを倒した俺たちアルシェの使徒は、チームスとの交戦に備え、アルシェの使徒探しを続行した。

ところがクリスのときみたいにそう簡単には見つからなかった。学校を休んでは旅をして、帰っては学校で勉強する。そんな日常だった。

俺からクリスまでの4人であることが多く、4人の結束は強くなっていった。俺たち4人はとても仲が良かったので、この4という数字をラッキーナンバーにしようと語り合った。そんなことを通じてさらに結束を深めていった。

今、俺たちは学校の図書館にいる。先生も一緒だ。自分たちがアルシェの末裔なら、かつてアルシェが何をしていたか調べることで、ほかの末裔の居場所のヒントが得られないかと考えたからだ。

アルシェというのはカコという時代で活躍した英雄のようだ。その時代の概要はこの国では常識なようだ。だが俺の記憶喪失は複雑なようで、なぜかそういうことだけは綺麗に忘れていた。

「あの、先生。カコについて教えてほしいんですけど」

「いいわよ。カコっていうのはね、上弦の月ドウルガと下弦の月ヴィーネの戦争のことなの」

「その2人の戦争ですか？」

「違うわ。ドウルガとヴィーネは派閥の名前よ」

「じゃあ2つの団体が争ったんですね」

「そう。彼らは召喚士の団体だった。エルト神を召喚するドウルガの一派、サール神を召喚するヴィーネの一派よ。

彼らは抗争を続けたの。ところがアングラント王とイクスタン王のときに事情が変わった。アングラントにはイーファという息子、イクスタンにはルーキーテという娘がいた」

「仇敵同士ですね」

「そう。ところがイーファとルーキーテは恋に落ちてしまったの」

クリス「素敵よね。悲哀だけど」

俺は率直に迷惑な話だと思うと思ったが、黙っていた。

「イーファとルーキーテは互いの派閥の和平を願ったわ。そして息子のメテを設けた。ところが過激派のハーネとウロはそれをよしとしなかった。

イーファは異母兄弟のハーネを暗殺したわ。ところがルーキーテは同じく異母兄弟のウ

口の暗殺に失敗して殺されたの」

「それはかわいそうですね」

「ルーキーテを失ったイーファは悲しんで死んだわ」

「残されたメテという息子は？」

「大人になって優秀な部下を集め、使徒と名付けたの。その使徒の中に英雄アルシェがいたの」

「え、じゃあアルシェの使徒は本当はメテの使徒だったんですか」

「そうね」

「メテらはウロと戦ったわ。そしてウロに復讐を果たしたの」

「めでたしですね」

「ところが、そうでもなかったのよ。そのころにチームスが復活してしまったんだから。

メテ王はチームスを封印したの。そのときの立役者が英雄アルシェよ」

「それでアルシェは英雄と呼ばれてるんですね」

「そう。チームスに勝ったのはいいんだけど、この戦いでメテ王は疲弊してしまったの。

一方、ウロ亡き後、ウロの残党たちはソーンという少女を後釜にしたの」

「女の子を？」

「とてつもなく強い少女で、瞬く間に英雄ソーンと呼ばれるようになったわ。ソーンもメテと同じように使徒を結集したの。

そしてソーンらはメテ王らと戦った」

「どっちが勝ったんですか？」

先生は一瞬複雑な顔をすると、「ソーンよ」と言った。

「ソーンはメテ王を殺した。支持者を失った使徒らは英雄アルシェをリーダーに立てた。

こうしてアルシェの使徒とソーンの使徒の対立ができたわけ」

「なるほど……」

向こうで本を読んでいたリディアがとてとて歩いてくる。

リディア「お勉強終わった？」

「ああ。だけどアルシェとソーンが対立して、どっちが勝ったんだ、リディア？」

「ソーンだよ。メテ王にも勝って英雄アルシェまで倒しちゃうなんて強すぎだね」

「そうか……俺たちアルシェは負けてばっかだな。そんなのの末裔で大丈夫なのかな」

少し不安になった。

リディア「アルシェは負けたけどね、結局その後ソーンも死ぬの。ソーンは私に暗殺されたのよ」くすくす笑うリディア。

「はぁ？ どういう意味？」

「あのね、ソーンを暗殺したのは少女リディア。私と同じ名前の女の子。アルシェの恋人だったの」

「つまり、恋人の復讐か」

「そう。結局リディアはその後ソーンの残党に殺されてしまうけど」

「復讐の応酬だな……黒い歴史だ」

俺は本を閉じた。

その瞬間、爆発音が聞こえて飛び上がった。

「なっ……」驚く皆。

「いまの音は？」

クリス「教室の方みたい」

慌てて教室に走っていく。ドアを開けると、窓が一部吹き飛んで壁に大穴が空いていた。空いた空間の向こうには男が一人。大きな男だ。ヴァーナとは違う大きな甲冑を着ている。そして手には大剣。

一瞬ヴァーナかと思ったが、別人のようだ。飛空艇もない。

「リディア、けが人を頼む」

「え……はい。でも私、回復魔法って苦手なんだよね」

「ファミイちゃん、無事か！」叫ぶと瓦礫の下からよろよろと少女が出てくる。

「はい、セレンさん。大丈夫です。ちょっと足を捻っちゃいましたけど」

「よかった。怪我した連中の治療を頼む。俺たちはこいつの対処をする」

「はい！」ファミイは倒れたクラスメートのところに駆け寄った。

「お前……」睨みを利かせる「誰だよ。いきなり襲ってきやがって」

「我は異性魔王アシュ」重く響く声が鎧の向こうから聞こえる。

「異性魔王(sornlins)? 「ソーンの悪魔」ってどういう意味だ？」

「……」

「なぜ答えない。お前は何をしにきた」

「汝ら、第4期4代のアルシェだな？」

「4期4代……? アルシェの末裔には違わないが……その数は何のことだか分からん」

アシュは大剣を抜く。

「ばかっ、ここで抜くな、人がっ」といったところでアシュは剣を振り下ろした。ユノが飛んでくる。俺たちはとっさにユノを撃って相殺した。クラスメートの悲鳴が聞こえる。

「アシュ！お前の狙いは俺たちか！」

「いかにも」

「お前もヴァーナと同じく、悪魔に国を売ること国を守ろうと考えているのか」

「否。私の目的はアルシェとアルバザードを滅ぼすこと」

「なんだって!？」

「まずはお前たちアルシェ。そして次は忌々しいアルバザード、ルティアだ」

もう一度アシュが剣を振るう。今度はユノが多い。防ぎきれない。

「まずい、持ちこたえられない！みんな、逃げろ！」

ところがもう遅い。やばい、死者が出る。

するとそのとき、リーザ先生が一步前に出て、片手でアシュのユノを掻き消した。

パシュっと言って巨大なユノが消えた。一瞬で。大砲の弾のように飛んできたユノを、ピーナッツを半分に割るような簡単さで揉み消してしまった。

「な……」固まったのはむしろ俺たちだ。リーザ先生はごまかすように目を上に向け、何もしらないような顔をした。先生が強いなんて話は聞いたことないぞ。特にユノが専門ではないはずなのに。

「せ、せんせ……」

リーザ「アシュだっけ？あなた、突然迷惑なのよね。今日は帰ってちょうだい」

アシュ「く……貴様か。なるほど、それでここにアルシェの使徒が……」

リーザ「少し黙ってなさい」

先生は目を細めると、冷たい声で言い放った。

「ぐ……」

するとアシュは苦々しそうな雰囲気を持ちながらも、教室から離れていった。

<炎剣のギル>

mel 4 fleakat

「ねえね、セレン君！知ってる！？」

放課後の教室。机の前でリディアが息巻いている。俺の机に手をつけて、顔を覗き込んで興奮して話している。

「どうしたの？」

「ソエンの谷の向こうに突如大きなお城ができたんだって！」

「谷の向こうってことは……」チラとクリスを見る。

クリス「ザミア街ね。私、よく買い物とかしてたわ」

「街の中に城ができたのか？」

クリス「それ、ないと思う。多分、ザミア森林よ。違う？リディア」

「そうなの！ザミア森林の中のうっそうとしたところに、急に黒くておっきなお城ができたんだって！

真っ暗な森の中で、ひっそりとたたずんでいるの。カラスが周りを飛んでてね、蝙蝠も出るのよ。虫も蠢いていて、光が差さないんだって」

「そんな立地の悪いところに誰が土地を買ったんだろうね」

「もう、セレン君たら、気付かないの？そこにこないだのアシュがいるのよ」

「ええ？なんであいつが」

「悪者にも拠点は必要でしょ」

「そりゃそうだが、なんであいつって分かるんだ」

「勘よ。だってアデルが徘徊してる森に住んでるなんて異性魔王とやらしかできないでしょう？」

「まあ、ほかに該当者ナシだもんな」

オヴィ「どうする？じゃあこっちから攻めに行くか？」

クリス「危なくない？」

オヴィ「だけどこないだみたいに攻め込まれると人を巻き込むし、大変だぜ」

クリス「確かに……」

じゃあとりあえず様子だけでも見にいこうということで、俺たちは先生に休学の許可を取った。そしてソエンの谷を越えてザミアの街へ入り、そこで一泊した後、ザミア森林へと向かった。

ザミアの街を出ると森林までは農道になっていた。森では林業が行われているので道があった。

しかし暑い。日光にやられる。リディアはうっすら汗をかき、服をぱたぱたさせている。

ところが森に入ると涼しくなった。心地よい空気だ。入口の方は全然鬱蒼としておらず、虫もなく、乾いていて、心地よい。

「その切り株で水でも飲むか」といって少し休憩を取った。

「それにしてもアシュの奴、なんだって俺らやアルバザードを滅ぼそうなんていうんだ」
リディア「異性魔王……ソーンの悪魔って言ってたけど、アルシェとソーンの抗争に関係あるのかなあ」

「かもな……。それに、俺たちのことを第4期4代って呼んでたよな。じゃあ第3代とかもいたってことだよな。あれはどういう意味なんだろう」

リディア「リーザ先生も知らないみたいだしねえ」

水を飲むと、4人は立ち上がった。

「さて、行くか」といったところで突然クリスがしーっと言った。

「どうした？」

「伏せて、誰か来る」

「え？」慌てて皆伏せた。しばらくすると大きな足音が近付いてきた。俺たちは木の影から見ていた。すると出てきたのはアデルの軍団だった。カイラのような大型の魔物がうじゃうじゃいる。

「何しに行くんだろう、あいつら」

オヴィ「完全に武装しているな。アルバザードを攻撃する気だろ」

「進軍してるってことか？」

「だろうな。まずはザミアってとこだろう」

クリス「え、ちょっと待ってよ。ザミアの人が何をしたっていうの！」

オヴィ「何も。悪魔にはそんなこと関係ねーよ。だが、俺たちには大いにあるよな。じゃあ俺たちがすべきことは分かってるな」

するとオヴィは立ち上がる。クリスの頭をぽんぽんと撫でる。

「大丈夫、安心しろ。俺たちでお前の思い出の場所は守ればいい」

クリスは少し赤くなって、オヴィの手を振り払った。

「やめてよ、子供じゃないわ」

軍団の魔物の数、およそ200。1匹1匹が強いので半端ない勢力だ。

その中にアシュの姿はなかった。

俺たちは全員が過ぎ去った後、背後から奇襲をかけることにした。

アデルも人間も常にヴィードを張っているわけではない。気を抜いているときは無防備だ。刺せば一瞬で殺せる。

俺たちは心の準備をしてから近寄った。そして相手に気付かれる前に突っ込んだ。

武器でしんがりの連中を突き刺した。悲鳴を上げてアデルが倒れるが、大所帯なのです

ぐに成員が状況を把握できない。俺たちは次々に後ろの連中を潰していった。

「人間だ！戦闘を開始せよ！」

アデルが騒ぎあう。俺たちは叫び声をあげてひたすら切り捨てて回る。まるで言葉を失った猛獣で、どちらが魔物か分からない。

魔物が戦闘態勢に入る。まずい、そろそろ奇襲の効果も解けてきた。ユノでガードを始めた。俺たちは後方に飛んだ。

「オヴィ、どれくらい殺した？」

「合わせて10ちょっとだ。もっと刺したが、殺しきれなかった奴は回復魔法で戻ってくるだろうよ」

「残り190かよ。ありえないな。こっちは4だ」

「ちっ、ザミアの街に先回りして自衛隊と一緒に戦えばよかったか」

「いや、ダメだ。子供でも俺らアルシェの末裔のほうがもはや軍人より遥かに強い。お前は軍人10人相手に負ける気がするか？」

「しねえな。ヴァーナに感謝だぜ」

オヴィが斧を構える。

「ire!」の声で雷が魔物を焼き払う。

体勢を立て直した魔物が弾丸のようにユノを撃ってくる。俺はユノで相殺したが、弾状なので厄介だ。1個を相殺してもすぐ次が来るので間に合わない。

「リディア、この弾みみたいなユノはなんだ」

「なんだって、volkでしょ。ユノを弾丸みたいに撃つのがvolkで、光線みたいに撃つのがvontよ。volkは威力では劣るけど、弾数が多いから一々ユノで相殺してたら流れ弾に当たるわ」

リディアはユノを体の周りに球形に張り巡らす。弾の中にリディアが入ってしまったような形だ。volkが当たるが、バリアに弾かれていく。

「リディア、何してるの!？」

「ユノでバリアを張ったの。volkには有効でしょ」

「だけどジリ貧だよな、それ。体力が奪われるだけで」

「じゃあどうするの？」

「いっそ突っ込んじまえばいいだろ、こんな風に」

俺は左半身にユノを集中させ、突っ込んだ。volkがバシバシ当たるが、物ともしない。そのまま肩から魔物に突っ込んだ。タックルで魔物を吹き飛ばす。

そのまま魔物の輪の中に入ると、カイの字（大の字）になってユノを両手から噴出した。魔物は消し飛んでいき、俺の手の左右一列にいた連中が一気に消えた。そのまま剣を振り、周りにいた連中を斬り捨てた。

「なんだ、このガキは！」

「あなどるな、こいつら恐ろしく強いぞ！」

魔物のざわめきが聞こえる。リディアたちも俺の真似をして突っ込んでくる。魔物の中に入ってしまえば連中もユノを撃てない。仲間に当たるからだ。

「よし、みんな、このままでいけそうぞ！」俺が鼓舞すると3人は士気を高めた。

「なーんの騒ぎだよ、おい」

高い声がした。それは子供の声だった。

子供が軍隊に？

周りの魔物がビクッとして動きを止める。ササっとどいて道を作る。魔物の作った道の中から出てきたのは、一人の少年だった。

赤髪で、俺たちと同じくらいの年の少年だ。穏やかな顔をしていながら、目は好奇心で一杯だ。灰色のぴっちりした皮の服を纏い、胸には鎖帷子を巻いている。腰には鞘をぶら下げており、右手で剣を持っている。肩をぽんぽん叩きながら俺たちに近寄ってくる。

「……だれだ。お前、人間だろ。なぜアデルの中にいる？」

「俺は炎剣のギル。お前は？」にっとうる。

「俺は……セレン。アルバザードを潰そうとするアシュを食い止めようとしている」

「セレンか。ああ、アシュが言っていたアルシェの末裔だね。よし、じゃあ勝負だ」

剣を構えるギル。切っ先に炎が起る。

「待て。お前はアルバザードを滅ぼそうとするアシュに肩入れするのか」

「ふうむ、俺はいわゆる傭兵でね。赤い死神とも呼ばれている傭兵で、裏の世界じゃ有名なもんさ。今は雇われてアシュの味方をしているだけだよ。だからお前は敵、OK？」

「リディア、話し合いは無理なようだ。3人はアデルを頼む。俺はこいつを倒す」

ギルがとんとんと地面を蹴った。すると次の瞬間、目の前に現れた。

「うわ！」すんでのところで避ける。速い！

「ほっ！」ギルが斬撃を浴びせる。俺は剣で受け止めるので精一杯だ。

「おお、お前よく避けたねえ。剣の素質あるよ」

「そうかよ！」

俺は剣を振り下ろしたが、ギルは剣で受け止める。

そんな剣撃の応酬が続き、10分以上戦っても勝負は一向に付かなかった。

ギルと睨みあう。互いに息が切れている。気をつけても肩で息をしてしまう。互いに相当疲れてきたようだ。

そろそろ決着をつけないと……。

俺が剣に力を籠めるとギルは「ふっ」と笑った。かと思うと「やーめやめ」と言い出し、剣を肩に乗せた。

「なんだと……？」

「そう怖い顔しなさんな。俺の負け」

「なんだ……急にどうしたんだよ。どう見ても引き分け。まだ勝負はついていないだろう」

「いや、俺の負けだよ。ほら」

ギルが指さすと、リディアたちが彼を囲んでいた。魔物は既に彼女たちが倒したようだ。あれだけいた魔物を。

リディアは魔法を唱え終わり、いつでも撃てる準備ができている。オヴィは斧を振り上げ、クリスは爪で飛び掛る姿勢だ。

「impra mos armiva (アルミヴァ神に囲まれた悪魔インプラ。四面楚歌)」ギルは肩をすくめる。

「——のようだな」俺は剣をしまう。

「どうした？トドメは？」

「お前はただの傭兵だ。斬っても意味はない。それに、俺は勝った気がしない。お前は強いよ。こんな勝ち方じゃ納得行かない。行けよ」

ギルは目を細め、剣をしまう。

「お前、甘いな。傭兵にそんな情けが通用すると思ってるのか？」

「思うよ、お前にはな」

「なんだって？」

「お前、好きで傭兵になったのか？その年で？家族はどうした」

「……小さいころから親なんて見たこともない。記憶のあるときから既に傭兵だった。人を斬るか魔物を斬るか。それが俺が生きるための唯一の道だ」

「そうか。だが、お前には邪悪さを感じられないんだよ。アシュの傭兵など止めてしまえ」

「ああ、どの道、俺はもうクビだ」

「ギル……お前、傭兵そのものも辞めろよ」

ピクッとギルが肩を震わせた。

「そうか、その言葉は俺に「生きるな」と言っているんだな」

振り向いたギルの額は光っていた。

「そうじゃない」

「分かってる。だが、俺の人生を否定されたことには変わらない。セレン、やはりここで決着をつけよう」

ギルは剣を抜く。俺も合わせて剣を抜く。

ギルが突っ込んでくる。動きを見極め、剣を横に薙ぐ。

——相打ちだった。両者の剣がぶつかりあった。俺の額も光っていた。

「ギル、違うんだ。あの言葉は、俺たちとともに生きろということだ」

「どういうことだ？」

「その額の紋章、お前もアルシェの末裔である証拠だ。お前は俺らの仲間なんだよ。一緒にチームスを倒すべく生まれてきたんだ」

「傭兵の俺がか？親にも棄てられたゴミみたいな俺がか？」

「ああ、そうだ」

するとギルは剣を収めた。

「……わかった。お前たちに付いていこう」

リディア「本当に？」

「ああ」

「じゃあ、サプリに行こう！先生に紹介しなきゃ」リディアはギルに近寄って手を取る。ギルは複雑な笑みを浮かべた。

さっきまで戦っていたのに仲間になったというのは本当に数奇な運命だ。

その日はザミアの街に泊まることになった。

風呂に入ってホテルのベランダに出ると、ギルが風を浴びていた。

「よう、元気か」

「ああ。あ、そうだ、セレン。俺たちの決着はまだ付いてなかったな」

「そうだったな。いつか決着つけようぜ」

するとギルは笑って「望むところだ」と言った。

「お前、風呂は？」

「そんな気分じゃないさ。傭兵稼業は長かったんだ。心の整理が必要でな」

「そうか……」俺は部屋に入ろうとした。

「……あのおさ」少し迷ったが、俺は言うことにした。

「ん？」

「お前、親のこと知らないなんて……嘘だろ」

「え……？」ギルの長い髪が風で揺れる。

「俺は……お前のことをゴミだなんて思わないぞ」

そう言って、後ろを見ないで窓を閉めた。

<精霊フルミネア>

mel 4 flea

「行くって言ったら絶対行くの！」

リディアが教室で叫んだ。

「まーた始まった」ギルが苦笑しながら耳を塞ぐ「セレンのせいだぞ」

オヴィ「そう。お前は一言多いんだよ」

「ええ、俺かよ!？」

ことの始まりはリディアが持ってきた毎度お馴染みな下らない噂だった。なんでもアルバザードの北にあるアルシアの街に精霊が現れたとかなんとかいう噂だ。しかもその精霊は少女の姿をしており、ときおり額が光るという。

だがこの手の噂にリディアはよく引っかかる。始めは信じて動いていた俺たちも、段々面倒になってきた。

それで俺が「またアテにならん噂に引っかかりやがって」と言ったら、自分の言っていることは絶対正しいと言い出し、行くの行くのと駄々こねだしたというわけだ。

俺はため息をつきながら頭を抱えた。なんだかな、2年前にあったときはもう少しこうトローンとしていまいち頼りない子だったのに、最近少しうるさいな。

クリスが「まあ行ってみるだけ行ってみようか」というので、結局行くことにした。

アルバザードを抜けてソエンの谷を渡り、ザミアには向かわず別の道を歩く。それなりの距離があるが、行けない距離ではない。

そして1週間ほどかけて俺たちは森と泉の街アルシアへ辿り着いた。

オヴィ「ここがアルシアか」

「何?有名なの？」

リディア「アルシアの11魔将がいたところだからね。私たちがいま使っている魔法の体系は彼らが大成したものなのよ」

「へえ〜。雷とか炎とか魔法が分類されてるのは彼らのおかげってわけか」

そのまま街で噂の精霊の情報を集めた。どうも街の外の泉に出るという話だ。

日が暮れたのでそこで一泊した。

翌朝、アルシアを出て噂の泉へと向かった。だが泉へ向かうだけで半日潰してしまった。泉に着いた後も、たくさんある泉の中から該当する泉を捜さねばならないのでさらに時間がかかった。

そんなこんなで夕方になってしまった。

「もう日が暮れるな。泊まる場所がなければ街に戻らないと」

リディア「さっきコテージがあったよ。あそこに泊まれそう」

リディアに連れられていくと、小さなコテージがあった。鍵はかかっていなかった。誰も使っていないのだろう。中は暖炉があり、テーブルがあり、木の椅子があり、といった感じだ。調度品はなく、家具が最低限あるだけだ。食料の蓄えがあるといいのだが。

「結局精霊なんか見つからなかったな」

クリス「しょうがないわよ。また明日探しましょう」

オヴィ「しかし暑いな」

クリス「リディア、水浴びにいこう」

リディア「うん、行こう」

オヴィ「お、いいな。セレン、ギル、俺たちもいくか」

リディア「そうよ、セレン君も行こう」

「え……いや、お前はクリスと行けよ」

リディア「なんでよ？」

「なんで……っていうか……」

「……へんなの」リディアは首を傾げてクリスと外に出た。いや、お前がな。

俺は男子と外へ出た。

近くの泉に行ったらリディアとクリスがいた。

「あ、そこはダメだ。女子が使ってる」

「いたのか？」と言ってオヴィが首を出すので、顔に手を当てて押した。

「おい、なにすんだよ、セレン」

「いや、着替え中みたいだから」

「……悪い」

「なあ、その着替え中の姫様たちだけど、お前が心配するようなことでもないみたいだぜ」とギル。

「はあ？」振り向くとクリスが手で俺たちを呼んでいる。声を立てるなど合図をしている。

なんだか慌てている様子だ。なんだろう……。

「俺、ちょっと行ってくるわ」

一人で降りていくと、クリスが俺の腕を取って引っ張った。耳元で囁く。

「ねえ、あそこ見て！」と泉を指さす。

「……人か？」

泉の中には人がいた。長い髪の……女の子のようだ。

「女の子が水浴びしてるみたいだけど……」

クリス「さっき額が光ったのよ」

「ほんとにかよ！？じゃあ彼女が精霊！？」

じっと見た。そうは見えないが……でも綺麗な子だな。黒い長い髪と、大人しそうな顔。綺麗な肌だ。少し痩せているな。

いや、そんなことよりオヴィたちを呼ぼう。そう思って呼ぼうとしたとき、リディアが目に入った。彼女は着替え中だったようで、パンツ一枚で立っていた。胸も隠さずに立っているの思わず目をそむけた。

「おいリディア、着ろよ」といって上着をかけると、「ありがと。でも寒くないよ」と返す。俺はあっけにとられ、無言でリディアに上着を着せ、男子を手招きした。

やってきた男子に事情を説明すると、2人も少女を見た。

オヴィは口に手を当ててじーっとしている。ギルはどちらかというとぼうっとしていた。あれ、珍しく軽口を叩かないなと思ったとき、少女の額が光った。

「ほら光った！」とリディアがはしゃいだ。

「わ、バカ！」と言って俺が口を塞いだけど、もう遅い。少女はハッとこちらを振り返ると、腕で胸を隠した。一瞬の間があってから、少女は甲高い声でキャーと悲鳴を上げた。耳が破れるかと思った。

少女は泉の中に潜ってしまった。

オヴィ「おい、逃げたぞ」

クリス「じゃなくて、隠れたの。紋章は見たでしょ。……余計なとこばかり見てないでしょうね？ほらほら、これ以上初対面を最悪にしたくなかったらあっち行ってなさい」

クリスに追い出されて男子は外へ出された。

「あのさ、この後凄い気まずくないか？」歩きながら問う。

オヴィ「かなりな。まあでも悪気はないし。なあ、ギル？」

ところがギルはぼうっとしたまま何も答えなかった。オヴィが笑い出す。

「なんだよお前、女の裸初めて見たのか？」

「ああ……」と素直に答えるギル。

「へえ、それで放心してるのか」

「凄く……綺麗だった」

「あん？……ああ、そうだな。なんだよお前、あの子のこと気に入ったのか？」

「え……」ギルは赤くなった「い、いや……そんなんじゃなくて」と言って黙ってしまった。

「なあオヴィ」俺が口を挟む「そんなこと言って、お前はほかの女を見たことあるの？」

「そりゃまあ、なくはないよ」

「リディアじゃないよな！？」俺は少し不機嫌に言ったんだと思う。オヴィはちょっと驚いた感じだった。

「ねえよ。あいつとは幼馴染だけど、サプリは寒いから川遊びでも裸にはならなかったし、風呂も一緒に入ったことねえよ」

「そうか……」胸を撫で下ろした。

オヴィはため息をつく「おいおい、なんだよお前ら、頭の中女だらけかよ」

「そんなことねえよ！」ギルと俺の声がハモる。

「ギルは精霊に一目ぼれ。セレンは自分が助けた同居中の少女に惹かれてる」

「ちがっ……。そんなことってお前こそ、クリスが気になってるだろ！」

「そんなことねえよ！なんで俺があんながさつな女」ぶつぶつ文句を言っていたが、オヴィの顔は赤くなっていた。

「あの子さ……」ぼーっとギルが呟く「きれいだったな……」

俺とオヴィは顔を見合わせて首を振った。だめだこりゃ。

泉で水浴びをしてからコテージに戻った。しばらくするとクリスとリディアが少女を連れて戻ってきた。少し背の高い少女で、髪が長い。肌が異様に白く、頬が桃色だ。白いサメルを着ていた。本当に精霊のようだ。

「話は付けてきたわ。この子はフルミネア。フルミネア、セレンとオヴィとギルよ」

「よろしく……」少し小さい声で囁く少女。若干内向的なようだ。心を開くのに時間がかかりそうだ。

フルミネアを囲んで夕飯になった。少し彼女も緊張を解いてくれたようだ。

「なあ、フルミネア、君はここで暮らしているの？」

「ええ、そうです、最近は」

「最近は？」

「元々私はイネアートの人間なの」

リディア「とおーい！寒いところだよね！？」

「花がたくさん咲く綺麗なところなのよ」

リディア「へえ、いいなあ、行ってみたい。フルミネアはそこで暮らしてたのね」

「ええ。だけど天災で一家離散してしまって……。妹が生きているという手がかりは見つけたんだけど、再会できないのよ。どこにいるか分からなくて」

「そうなんだ……それで旅をしていたの？」

「そう、アルバザードにまで来てしまったわ。それでも妹は見つからなくて」

セレン「俺たちと一緒にいれば色んなところに行くから、妹の手がかりも見つかるかもな」

リディア「そうだよ。先生に頼んであげる」

するとフルミネアは嬉しそうにした。

夜、起きたらフルミネアが寝床から出ていた。俺は心配になって外に出た。するとフルミネアは水辺にいた。

「フルミネア、どうしたの？」

「占いです。水と月で、次の使徒がどこにいるか占っているんです」

「凄いな、そんなことができるのか」横に座った。水面が静かに揺れている。

「さっきギルさんが来ましたよ」

「そうなの？知らなかった。今起きたばかりだから。あいつなんて？」

「妹のことについて色々励ましてくれました。優しい人ですね」

「うん、あいつはいい奴だよ」

「……あ、出ました」

「占いの結果？どう？」

「……アデュ」

「アデュ？」

「ケートイア国のアデュ。山雪部にあります。でも今行くのは危険ですね」

「どうして？」

「チームスでアルバザード政府が混乱しているのをいいことに、ケートイアの悪王が自分に逆らう者をアデュにある収容所に次々と連行しているんです」

「……収容所」唾を飲んだ。

<アデュ収容所>

mel 4 alis

アルシアでフルミネアに出会ったあと、俺たちは一旦サプリに戻り、先生に報告をした。
その後少しして、俺たちはケートイア国のアデュという都市に向かった。

「ここが……アデュ」

リディア「閑散としているね。なんだか不気味。妖気が漂っているというか……」

フルミネア「何となく呪われた感じがしますね」

「ここに次の使徒がいるのか」

「ええ、私の占いによると」

オヴィ「しかし、どうやってアデュに入れればいいんだ。見ろよこのフェンス。到底昇れないぜ。街中に張り巡らされてる」

ギル「しかもユノで飛んで入れないよう、魔法がかかっているな」

「どういうこと？」

ギル「フェンスの上はユノが無効になるんだ。そういう魔法がかかっている。つまり飛び越えようとしたら落下してあのフェンスの上の剣に串刺ししてわけ」

「なるほどね。それにしてもなんでこんなガードが固いんだ」

クリス「収容所からの脱走防止よ。この国のこの都市はほとんど収容目的だけで使われているからね」

「誰が収容されてるんだ？」

フルミネア「ケートイア王に逆らったか、逆らいそうな人間です。多くは言いがかりみたいなものです」

「……収容された人はどうなるんだ？」

皆黙った。

先ほどからリディアが黙っている。

「どうした、リディア？」

「……おなかが痛い。こういうところ、怖くて……」

「大丈夫かよ」といっておなかをさすってやった。

「ありがとう。私、こういうの怖くてダメなの……」

「無理するなよ。辛かったら俺に言え」

「うん、わかった」

「なあフルミネア、アデュにはどうやって入るんだ？」

「それは……収容されるしかないでしょう」気まずく笑う。

「よし、じゃあそれで行こう」

「ええっ!？」皆が驚く。

「なんだよ、正規のお手続きで入るのが一番近道だろ？」

クリス「それはそうだけど……入ったらどうなるかわかってるのよね？」

ギル「生きて帰れる保障はないってね」

「でも入らないと使徒には会えない。それに、使徒のことを度外視しても、このアデュをこのまま放っておいていいものだろうか」

「……よくない」リディアがぼつりと呟いた「……行こう、皆。アデュにいる人を助けなきゃ」

オヴィ「だな。で、使徒にも会うと」

ギル「さて、じゃあ逮捕されますか」

ギルは歩き出す。後を付いていく俺たち。ギルは見張りをしている役人に話しかけた。俺たちは少し離れて見ていた。始めはふつうに話しているように見えたのだが、突然ギルが剣に炎を籠め、役人を斬り捨てた。

「なっ！」驚く俺。

いきなり人殺しかよ。さすが元傭兵、躊躇ないな。

フルミネアが嫌悪した表情でギルに詰め寄る。

「この人を斬る理由があったんですか」

「なかったよ」平然と答えるギル「だからはじめは話しかけて適当にいちゃもんつけさせようと思った。でも、どんな人間をぶち込むのかって聞いたらさ、あまりに下らない答えだったんで、思わず斬っちゃったんだよ」

フルミネア「下らない答えって……」

ギルは鞘に剣を収めると、フルミネアの肩を抱いた。

「ほんとに下らない差別さ。この世のどこにでも偏在しているような。

君も俺も、みなしごは皆ゴミなんだって。そういうのは社会を汚すから無条件で悪なんだって。俺は奴隷、君は売春婦として死ぬまで働かせるそうだよ。俺がみなしごだって言ったら「じゃあ死ね」って言ってきてさ」

「そんな……」フルミネアは固まった。

「なんかそんなことがこのフェンスの向こうで実際に行われてるんだって知ったら、たまりかねて斬っちゃったよ」

フルミネアは黙った。

それから数分もしないうちに役人が集まってきた。俺たちは素直に逮捕された。武器を取り上げられ、大きな列車に乗せられた。乱暴に投げ込まれて頭を壁で打った。

「いてて、なんだこの列車は……」頭をさする俺。

まったく、ギル以外は何もしてないのに全員収容所送りだなんてどうかしてる。

「魔列車だよ」呟くギル。

「知ってるのか？」

「傭兵時代に黒い話はたくさん聞いたからな。アデュの外から収容所に直通する列車さ」
するとギルは歌いだした。

「♪魔列車に乗ったら帰れない。片道切符の黒い列車。土煙を巻き上げて、走るよ走る。走るごとに煤汚れて黒くなる。乗ったら帰れない、魔列車。片道切符の黒い列車」

フルミネア「こわい歌……」

「いつ誰が歌いだしたか分からない。いつの間にか広まった暗い歌さ。さて」

ギルは立ち上がると客室に向かう。部屋の中には大勢の人がいた。子供から老人まで、ぼろぼろの衣服をまとったものから綺麗な服を着た女性までいた。

みな、魂を失った顔で思い思いに座っている。椅子に座る少女。発狂して叫んでいる若い男。地面をのたうちまわっている男。床にへたりこんでいるおばさん。

クリス「なにこれ……ひどい」

オヴィ「みんな自分の運命を悟ってるんだろうな」

クリス「あんな小さな女の子までいるじゃない。どこが政治犯なのよ」

ギル「あるいは孤児だったのかもね」

クリス「……。……。やめた」

セレン「え？」

クリス「使徒探しは後回しよ。アデュを開放してケートイア王を殺しましょう」

俺は黙っていた。もしその間にアルバザードがアシュに襲われたらどうするんだろう。それに、国の軍隊相手に勝てるとは思えない。

リディア「ねえ、セレン君、あの人たち何してるの？」

リディアが指さした方を見してみる。

「ほら、男の人がなんか女の人の上に乗っかっているように見えるけど」

「え？」近寄って見たが、すぐに理解して引き返した。

「リディア、見るな」

「え、なんで？」

ギル「セレン、夫婦だったか？」

俺は無言で頷いた。

ギル「もう互いに会えるのはこれで最後と知っているんだ、彼らは」

「最後が魔列車の中かよ……」歯を食いしばった「分かった、クリス。アデュを解放しよう」

魔列車が収容所に到着した。人々は嘆き、中には発狂するものもいた。役人が人を引きずっていく。男女を始めに分ける。妻や娘と引き離された男たち。女たちは泣き叫び、役人の銃の柄で殴られた。これが彼らにとって最後の別れなのか。あまりにあっさりすぎだ。ふざけてる。

俺たちも男女に引き裂かれた。リディアが蒼白な顔だったので心配になった。ここの光景があまりに衝撃的だったらしい。田舎育ちの女の子には想像だにしない光景なのだろう。

収容所の中に連れて行かれると、服を着替えさせられた。役人が来て説明する。どうやらこの中の施設で労働することになるらしい。

施設に入ると異様な光景を目の当たりにした。死んだ目の人間が無言で仕事をしている。役人が銃を持って監視している。ことあるごとに役人が声を荒立てては収容者を打つ。

ぼ一っと見ていたら早速俺も腰を蹴られた。

「何ぼさっとしてるんだよ、チビ。働け」

くそっと思ったが「すみません」と素直に謝って持ち場についた。そこで 8 時間ほど働き、食事になった。粗末な食事が与えられ、さらに 8 時間働いた。体中が疲れて痛い。こんなところで毎日働いていたらすぐに死んでしまう。奴隷として使うならもっといたわれと思うのだが、死ねば代わりがくるので死んだら死んだでいいという考えのようだ。

「おい、オヴィ、ギル、生きてるか？」

雑居房で問うと、体力自慢のオヴィでさえ「あー」としか返さない。

「お前はでかいからまだ大丈夫だろうけど、俺みたいな細身の奴は体力ないから死にそうだよ」

「そ、そうか。俺も俺で死にそうなんだがな。でもお前の言うことも分かる。まったく、ふざけてやがる。なあセレン、いつここを潰すんだ？」

「全体像を掴まないことには誰を倒したらいいか分からないからな。とりあえず上司の役人に取り入って殴られないようにしとこう。そのうち生き延びて慣れてくればこの場所のことも分かるし、誰が親玉かとかも分かるだろ」

「まったく、アルシェの末裔のセリフがよりによって「取り入る」かよ」と笑う。

「しょうがないだろ。今暴れても無駄だ」

ギル「それより女子が心配だな。乱暴されてなきやいいが」

オヴィ「リディアはトロイから殴られてそうだな」

セレン「えっ！」ガバっと起きる。

ギル「いや、俺の心配は別のことだよ」

オヴィ「つまり……？」

ギル「レイプされなきやいいけどなってこと」

セレン「レイプ？おいおい、ふざけんなよ。無理やりセックスするって意味だろ？……ん？でもあいつら子供だしセックスなんてできないじゃん」

オヴィ「やる奴は子供相手でもやるんだよ。神話でもそうだったろ。神だってやってんだ。でも安心しろ。多分リディアは眼中にない」

セレン「なんだそれ。クリスたちのことだってちゃんと心配してるんだよ」

オヴィ「でもまあ、あいつら身の危険を感じれば暴れてるはずだから、大丈夫だろ」

ギル「そりゃそうだな、寝るか」

寝たが早いか、即役人に蹴り起こされた。

「な、なんだよ」といったらもう一度蹴られた。いたい……腹がよじれそうだ。ワケわか
んねえよ、何で朝から蹴られてるんだ、俺。

「起きろ」と言われて起きたらまだ 4 時間しか寝てないことに気付いた。おい、まさかも
う働けと？気持ち悪くて飯食えないんだけど。と思ったら飯さえなく、労働だった。

これは……死ぬわ。死ぬに決まってる。ガキの俺がこれなんだから、30 過ぎは間違いな
く体力なければすぐ死ぬだろう。

胃が焼けて痛い。とりあえず次の食事まで我慢して働こう。いつの間にか思考能力が落
ちてきて、どう時間をやりくりするかを考え出した。

そのとき、急に辺りがざわめきだした。

「なんだ」役人がざわつく。

「女子が暴れています」

「なんだと!？」

紡績所のところから声が聞こえた。

「リディアたちかな」

オヴィ「だろうな。いこうぜ。もうこんなところはたくさんだ」

ギル「1 日と俺らの根性は持たなかったなあ」と笑う。

「おい、お前ら動くな。何持ち場を離れてる！」銃を構える役人に俺は飛びかかると、今
朝の怨念を籠めて殴り飛ばした。相手のユノを突き抜け、役人は壁まで吹っ飛んだ。頭を
強く打って壁が血みどろになる。

「お前は死ぬ！」俺は死体に唾を吐いた。

「セレン、急げ！」

オヴィに言われて紡績所に駆け出した。入口に入ったところで目の前を氷の矢が通り過
ぎた。

「セレン君！」リディアだった「ごめん、怪我なかった!？」

「ああ大丈夫だ。騒ぎがあったときいてお前たちだと思ってさ。大丈夫だったか？」

「うん」

「役人は？」

「クリスと私で殺したよ」

「フルミネアは？」

「あっちで怪我した女の子の手当てをしてる。フルミネア、回復魔法が凄いの」

「しかし、何で騒ぎを起こしたんだ？まだ収容所の造りは把握してないんだろ？」

クリス「ごめん、私が短気起こしちゃって。襲われそうになったのよ、さっき。男が来て私を紡績所から連れ出そうとしたの。用件は分かったからね。冗談じゃないって思って」

オヴィ「そりゃ暴れても仕方ないな」

ギル「さて、これからどうやって収容所を占拠しようかねえ」

クリス「私を襲おうとした奴は蹴り飛ばしたから気絶してるだけだと思う。ほら、そのの」

ギル「じゃあこいつに聞いてみようか」といってギルは蹴り起こした。腹を押さえて男が起き上がる。

「おい、ここを仕切ってるのは誰だ？」

「……クソガキが」

ギルはにこりすると男の歯を殴って折った。口から血を出す男。

「今言うか、ぼろぼろになって言うか、どっちがいい？」

「……長官だ……」

「長官はどこにいる？」

「紡績所を出て左手。まっすぐ行って建物を出て右に大きな建物がある。正面入口から入って階段をあがり、2階正面が執務室だ」

「無用心なロケーションだな。入口からすぐ襲えるじゃないか。よっぽどアデュで謀反なんて想像外だったんだらうな」

「たすけてくれ……」怯えて男が言う。

「別にお前を殺しても意味ねえよ」ギルは男を地面に棄てた。

するとクリスが近寄り、死んだ役人の剣で男の性器を突き刺した。男が悲鳴を上げる。

オヴィ「おい、クリス！」

クリスは男に刺した剣を抜く。

「たすけてくれねえ。昨日アンタが犯した女の子も同じこと言ってたわよね。こんなことになるなら助けてあげればよかったわ。これでもうこれで乱暴できないわよね？」

オヴィ「……おい、気が済んだらもう行こうぜ」

俺たちはその場を後にした。

男に聞いたとおりの道順で執務室に行った。途中、騒ぎを聞きつけた役人が襲ってきたが雑魚など他愛もない。

執務室に行くと長官らしき男がいた。窓からは収容所が一望できる部屋だ。

「お前がアデュ収容所の長官か」

「お前ら……ここをどこだと思ってる」

「クズの部屋」

「……ガキが」

「さて、お前はどうか死にたい？」ギルは剣に炎を纏わせる。

「ふざけるな、こんなところで死んでたまるか」

ギル「——と、ここに收容された人々は誰もがそう思ったさ」

「くそ……」

「俺は赤い死神。地獄で呪え」

ギルは長官を斬り捨てた。長官は悲鳴を上げる間もなく絶命した。死体が炎をもらって焼ける。

ギル「行こうか。ここを燃やす手間が省けた」

外に出ると俺たちは逃げ遅れた役人を次々斬り捨て、收容者を解放していった。

歓声があでゅ收容所に起こる。

「次はこっちの部屋だ」少し気分が明るくなった俺はオヴィと解放を楽しんでいた。そしてその部屋のドアを開けた。

「セレン君、そっちはどう？」

後ろからリディアが来る。俺はボタンとドアを閉めた。

「なんでもない……ここはダメだ。手遅れだった」

「そう……」リディアはほかの部屋へ行った。

「オヴィ、ギル、先にいってくれ」

俺はドアを開けて入った。そこは拷問部屋だった。ただし、それは少女を拷問するために作られた特殊な部屋だった。あの長官の趣味だろう。被害者は皆少女だった。

あまりに酷い匂いにうっとする。手で押さえてるのだが腐った匂いと血の匂いが充満して鼻につく。吐き気がする。

生きてる子がいないか、一人ひとり身体を揺さぶっていった。ほとんどはとっくに死んだ子ばかりだった。

2人ほど生きてる子がいたが、標本採集された虫がピンの下で辛うじて生きているような感じで、もう明らかに回復魔法をかけても手遅れという感じだった。俺と目が合うが、言葉も出せない。蝶のように貼り付けられた女の子を見て、俺は「楽になりたいか？」と聞いた。女の子は赤い目のまま何も答えなかった。

俺が女の子の首に剣をかけると、彼女は目を瞑った。迷ったが、ぐいっと手に力を籠めた。ぐしゅっと音がすると、首が切れた。だが切断できなかった。女の子は目を見開いて脚をびくつかせた。

しまった。俺は慌ててユノを燃やし、思い切り剣を振り下ろした。魚の首を落すような音がして、少女の首が足元まで転がった。胴体からは血しぶきが泉のように噴出していた。

俺は荒く息をつきながらもう一人の少女のところへ行った。同じように蠢いている少女に近寄ると、小さく「ごめん……」と言った。今のが怖すぎてとても楽にしてやることが

できなかった。少女は目で何かを訴えてきた。俺には彼女が何を望んでいるのか分からなかった。ただ、ケートイア王だけは殺さなければならないと決意した。

俺はそのまま少女を置き去りにした。

部屋を出るとリディアは血だらけの俺を見てぎょっとした。

「どうしたの？役人がいたの？」

「違う。女の子だ」

「え？」

「女の子を、殺してきた」

「……セレン君？」

俺は無言で建物の外に出た。この一日で自分が随分たくさんを経験した気がした。一日でこの世の地獄を見た。

外に出たところで、急に呼び止められた。

「いやあ、あなたが私たちを助けてくれたんですか」

「え？」

振り向くと少年が立っていた。そばかすの少年で、気さくな感じだ。

「ああ。君もここに収容されていたの？」

「ええ、ヒュートに帰る途中で捕まってしまいました。でもおかげで助かりましたよ」

「そう、良かった」

「あなた方は随分強いんですね。これからどこに行くんですか？」

「俺たちは……ケートイアへ。王を倒す」

「そうですか、でもケートイアの軍隊を倒すのは難しいですよ。隣国の協力も得なければ」

そのとき、リディアたちがやってきた。

「セレン君、どうしたの。あれ、その子は？」

「ああ、申し送れました。私、ヒュート国のもので、リュウといいます」

「リュウ君？」

「ええ、助けてくれてありがとうございます。それで、この後ケートイアに攻め込むとか何とか」

オヴィ「ああ、ケートイア王を倒しに行く」

「なら、隣国の協力を得ないといけませんね」

オヴィ「そうだな。だがアルバザードはヴァノアルバが留守だぜ」

「ではヒュート国に求めてはいかがでしょうか。アデュ収容所の件についてはかなりヒュートも憤りが溜まっていると思いますから。あなた方が収容所を解放したとなればそれを契機にケートイアに攻め込むこともできるでしょう」

セレン「だけどヒュートまでの道なんて知らないし」

「私でもければご案内しますよ」

「いいのか？じゃあお願いしようかな」

<竜王のリュウ>

mel 4 alis

アデュを抜け、俺たちはリュウの案内でケートイアを縦断した。

ケートイアの首都ケートを迂回し、山道に行く。ひたすらケートイアの街を避けてヒュートへ向かうルートだ。遠く残暑が厳しいが、ヒュートで挙兵するまでは捕まるわけにはいかない。

だがケートイアの軍隊も馬鹿じゃない。俺たちがアデュを解放したことは通達を受けているので、俺たちがヒュートに来ていることは予想済みだ。アルバザードはヴァノアルバが出払っているのだから、早急に援護を求めるならヒュートしかないからだ。

ケートイア軍は山狩りをし、俺たちを探している。俺たちが街によらないのもお見通しのようだ。

「なあ、リュウ、あとどれくらいでヒュートに着くんだ？」

「そうですねえ、もう少しだと思うのですが」

オヴィ「お前、いつもそればっかだな。あともう少しで何日も歩かされてるぜ」

リュウは「あはは」と笑うだけ。オヴィがため息をつくとき、ギルが苦笑する。

「なあセレン」オヴィが耳打ちしてくる「もしケートイア軍に見つかったら、あいつを誰が守るか決めとかないとな」

「ん？リディアは自分の身くらい守れるだろ」

「じゃなくて、リュウだよ」

「ああ……」

リュウを見る。濃い灰色の装束を身につけ、腰に細い剣を下げています。力がないのだろうか、女物みみたいな細い剣だ。見慣れないな。俺が言うのもなんだが体も細いし、確かに頼りがいはないな。

そばかすがあるものの、リュウの顔は女のような。ぱっと見たら女の蠟人形のように見える。髪も長く、余計女に見える。かなりの美青年なはずだ。惜しむらくはそばかすか。

性格は楽道家というか、つかみどころがない。そんな話をクリスにしたら、「うーん、どうかなあ」と言っていた。彼女曰く、何か裏に隠していそうだとのこと。俺は見たままを信じてしまうが、クリスは裏に何があるのか見抜こうとする癖がある。

どうもクリスはリュウのことをあまり信用していないようだ。逆にフルミネアはリュウを気に入っているのか、よく話しかけている。リディアはというと、ある意味こいつの心が一番読めない。何も考えていないのか、天然でにこにこしているだけで、マスコットのようだ。

「リディアさ」と話しかけたところで上から何か降ってきた。

「ん？なんだ？」

じっと地面を見る。

——矢だった。

「え……？」

ふっと後ろを見ると、数十メルフイ先に矢があった。進路は俺の頭だ。まずいと思う間もなく、矢が迫ってきた。

「セレン！」

クリスが俺の前に俺の身の丈ほどの高さのユノを撃つ。矢は俺に当たる前にユノに当たり、かき消された。

「ぐっ……」

突然たくさんのユノを放ったクリスは膝から沈んでいった。

「ケートイア軍だ！」

オヴィが叫ぶ。目の前にはケートイアの軍がいた。前衛が矢を放っている。

次々と矢が飛んできた。俺たちはユノを目前に放ち、矢を防ぐ。第一陣が収まると、クリスの脇を抱えて走り出した。

「矢で射られたらたまらん。みんな、あの塔まで走れ！」

遠方の塔を指差して走っていく。クリスは途中で回復し、自分で走り出した。兵士たちは怒号をあげて追っかけてくるが、なまじ数が多いので細い山道では進軍が遅い。

ギル「おい、どうするセレン。あいつら遅いぞ。このまま撒いちまおうか」

「ダメだ、生かして返すわけにはいかない。俺たちの居場所がバレたら最寄の兵舎からこの十倍の数が山狩りに来るぞ」

ギル「なるほどな。塔で待ち伏せて皆殺しか」

リディア「それしかないね。でもあの人たちはアデュ収容所の役人と違って悪者じゃないんじゃないかなあ。悪くもないのに殺したりなんてできないよ……」

クリス「あんた、さっきセレンの頭を矢が突き抜けても同じこと言えた？あいつら私たちが殺す気できてるのよ」

フルミネア「そうです、彼らは子供にいきなり矢を放つような悪人です」

リディア「……そっか」

オヴィは眉をひそめてリディアを見た。俺は首をかしげながらも走った。

塔の中は螺旋階段になっていた。

「登るぞ。階段は細い。上にいたほうが有利だ」

兵士が続いて入ってくる。軽装兵が先に入ってくる。

「えいっ！」

リディアが欠けた石段を上から投げつけると、油断していた兵士の頭上にぶつかった。

兵士はぎゃっと短く叫びを上げると、頭を割って死んだ。

「今、目が飛び出てましたよね……」気持ち悪そうに言うフルミネア。顔色が悪い。

「ほら、山猫兵士さん、小鹿はこっちこっち」リディアは可愛い声で手招きする。

「そこだ、そこにいるぞ！」ほかの兵士が叫ぶ。

ユノを放つ兵士たち。こちらユノで応酬する。

「罅があかん。剣で突っ込め！」敵の隊長らしい兵士が命令すると、兵士たちは階段を駆け上がってきた。

剣で応酬する俺とギル。オヴィに先頭に立たせ、間に女子とリュウを挟む。

剣のやり取りは上からのほうがやりやすい。下から攻めるのは難しい。こちらは足切り
に気をつければいい。切られても致命傷にはなりにくい。だがこちらの攻撃は相手の頭や
胸にすぐ当たる。明らかに上のほうが有利だ。

また、重力も活かせるので、相手を螺旋階段の外に叩き落とすのもたやすい。

剣で突きあっていくうちに、相手は不利な状況に嫌気がさしたか、剣の手を緩めて魔法
で攻撃してきた。

「まずい、魔法じゃ俺とギルは不利だ」

「てゆうかこのパーティって魔法使いがいないから魔法戦に弱いんだよ！」上を走るオヴィ
の声が聞こえる。

「ここにいるじゃん！私が前に出るよ！」とリディア。

オヴィ「やめとけ、優等生。実技はいつも落ちこぼれだろうが」

リディア「むっかー！オヴィ君のバカァ！」

クリス「上まで出ましょう。ユノ中心の戦闘にした方が私たちには有利だわ。数はだいぶ
減らしたから、近接戦闘にしよう！」

走って屋上まで出ると、急に日差しが強くなって一瞬目が眩んだ。

兵士たちがあがってくる。その数ざっと30。多いな。

ギル「フルミネアちゃん、リュウと一緒に下がってて」

フルミネア「私も戦います」

ギル「我らがリーダーのセレンさんによると、誰か一人は後方支援をしないとイケないそ
うでね」

セレン「いつ俺がリーダーになったよ」と笑う。

ギル「あいにく個人プレー重視の元傭兵にはリーダーは手に余ってね」

ギルは兵士に飛び掛る。俺もユノを燃やして距離をつめる。クリスとオヴィが武器を手
に突っ込んでいく。リディアが中距離から魔法を放つ。

ヴァーナと戦った俺たちは子供にはありえない、一般的な大人としてもありえない
ほどのヴィードを持つようになっていた。はっきり言ってこの程度の兵士なら脅威ではな
い。

次々と兵士を斬り捨てていく。

「くそっ！このガキども、何者だ！」隊長が苦い顔で叫ぶ。

やがて隊長を残して兵士がすべて倒れた。

「馬鹿な……この人数で、なぜ……」隊長は剣を構える。

俺は一瞬たじろいだ。明らかに死ぬと分かっているのになぜ剣を構えられるんだ。逃げようとは思わないのか。俺が逆だったらとっくに逃げているだろう。なんだかここで寄って集って斬るのは弱いものいじめのように思えた。

そう思っているのはギルもオヴィも同じだったのだろう。その隙をついて隊長は突進してきた。

「はやい！」

意外なくらい隊長の動きは速かった。あっという間に俺たちの脇を抜け、リディアの肩を剣で突き刺した。リディアは「きゃあ！」と悲鳴を上げて吹き飛ばされる。そして後ろの壁に———壁がない。

「えっ！？」

俺が目を丸くしてリディアを見やると、彼女は背を丸めて塔の外まで弾き飛ばされた。ショックで意識が飛んでいるようだ。ふっと塔の下へ向けて落ちていくリディアの体。

「リディア！」

ユノを爆発させ、リディアに飛んでいく。空中で抱きかかえてやる。だが、明らかに間に合わない。一瞬、潰れたトマトみたいに肉汁を散乱させるリディアの姿がよぎった。

こんなにあっけなく大切な人を失ってしまうのか……？

「リディアー！」

声の限りに叫んだ。

そのとき、大きな叫び声とともに彗星が空から降ってきた。彗星がリディアに接触すると、リディアの体はその上に安置された。

彗星はぐいっと進路を上に向け、俺たちの頭上に現れた。太陽が彗星の影に隠れる。

俺は目を丸くした。それは彗星ではなかった。

「ド……ドラゴン」

それは水色の飛竜だった。有翼のドラゴンの背に、リディアは安置されていた。そしてその飛竜の上に、悠然とリュウが立っていた。

「リュウ……お前……」

「いやあ、危機一髪でしたねえ」と笑うリュウ。

リディアが呻きながら目を醒ます。

「あれ……私、塔から落ちたと思ったのに……。あれ、何これ。なんで飛竜の背中に乗ってるの、私？」

リュウ「ようこそ、ヒュート名物、飛竜の背中へ」

リディア「うわー、すごーい！」はしゃぐリディア。

リュウ「ふふ。……さて」

飛竜から飛び降りるリュウ。隊長に歩み寄る。

「くっ、しぶとい奴だ」

リュウ「私は無駄な殺生は好かないのですよ。このまま逃げたらどうですか」

「逃げれば家族もろともケートイア王に火あぶりにされる。俺には娘も妻もいるんだ」

リュウ「では、この状況で私たちに勝てると？」

「戦って死ねば妻と娘には見舞金が下りる。火あぶりにもされない」

オヴィ「おい、お前帰れよ。そんな話聞いて斬れるか」

「聞こえなかったのか。俺は帰れない」

隊長は構えると、リュウをめがけて突撃した。

オヴィ「リュウ、よけろ、あぶねえ！」

リュウはすっと腰の剣に手をかけるが、剣を抜かない。

「馬鹿、何やってんだ！」俺が叫ぶ。

と同時にリュウはバツと大きく踏み込んだ。

その刹那、リュウの額が光った。竜の紋章が浮かび上がる。

まさか……。

一瞬何が起こったのか分からなかった。

閃光が走ったかと思うと、隊長の右腕が宙を舞っていた。

「ぐわあ！」

右肩を押さえて地面に沈む隊長。

「おい、リュウ……今の何だ？」

リュウは細い剣をブンと降った。それは妙な剣だった。片方にしか刃がないものの、非常に切れ味のよい刃を持っていた。

「それ……なんだ」

「刀です。今のは居合いと言いましてね。鞘を使って抜く神速の抜刀術なんですよ」

フルミネア「悪魔キルセレスの技ですね」

「ええ、いかにも。……さて」

地に沈む隊長を見据えるリュウ。

「これで敗走兵ではなく負傷兵ですね」

「なんだと……？」

「貴方も娘さんも奥さんも火あぶりにはなりません。手荒なまねをしてすみませんでした。

今度こそ国に帰りなさい」

「……………すまない」

隊長は項垂れた。

「フルミネアさん、応急処置をお願いできますか」

「はい！」と言ってフルミネアは隊長に走り寄った。

するとその横を氷の矢がひゅっと通り過ぎた。

氷の矢は顔を上げた隊長の目を貫いた。

「あ……あ」

後頭部から矢尻が覗く。鮮血が氷を伝って落ちる。

「あ……いやだ……帰れると思ったのに……」

左手で宙を掴みながら、隊長は崩れていった。

どさっと音がすると、急に辺りが静かになった。

皆、無言で氷の矢が飛んできた方を見る。

——リディアだった。

飛竜の上で、氷の矢を放った右手を隊長に向けている。

「リディア……お前何やってんだよ……」

震える声で俺は尋ねる。リディアはきょとんとしている。

「何って……だって、誰も逃がさないって決めたじゃない」

「そりゃそうだけど……お前、空気読めよ」

「それに、一人だけ助けるなんて不公平だよ。ほかの死んだ兵士がかわいそうじゃない。

私、悪くないもん」

「お前……」

「やめとけ、セレン」オヴィが袖を引っ張る「こういう奴なんだよ、昔から。自分の正義やルールを絶対曲げないんだ」

俺は黙って俯いた。

リュウは無言で刀を鞘に納める。チンと乾いた音がした。クリスとフルミネアは下を向いたまま何も言わなかった。

<飛竜の帰還>

mel 4 alis

ケートイア軍を撃退した後、俺たちアルシェの使徒はヒュート国へ入った。
道中、俺たちはリュウに自らの素性を明らかにした。

ケートイア軍の隊長を一瞬で切り捨てたリュウの額にはアルシェの使徒の紋章が光っていた。彼も俺たちの仲間だったのだ。大人しそうに笑っている彼からは想像もつかない強さだった。

「ふむ、私がアルシェの使徒ですか。歴史は好きですが、まさか自分がその中の登場人物だったとは思いませんでしたね」

農道を歩きながらリュウが呟く。

セレン「できればリュウには仲間になってもらって、一緒に他の使徒を探す旅に付き合っ
てほしいんだけどな」

「それは構いませんよ。私も自分のルーツを探求するのには興味がありますし」

クリス「だけどまずはケートイア王を倒すことが先決ね」

ギル「で、それにはヒュート国王の協力を得なきゃならんわけだねえ」

フルミネア「私たちのような子供が行ったところで謁見できるかどうかさえ怪しくないで
しょうか……」

暗い顔のフルミネア。しかしリュウは「まあ大丈夫じゃないですか」と気楽だ。どうものんびりして見えるんだよなあ。

ヒュート城下に入ったら既に日が暮れていた。

「どこかで宿を取ろうよ」とリディア。

「そうだな。リディア、足疲れただろ」

「ううん大丈夫よ。ありがとう、セレン君」

リュウ「ケートイアの件は今夜中に話を付けたほうがいいと思いますよ。早ければ早いほ
どいいです」

オヴィ「そりゃそーだけどよ、もう城は閉まってるだろ」

リュウ「まあ行っただけ行ってみましょうよ」

オヴィは「かーっ」と呆れたように頭をかくと、黙ってリュウの後を着いていった。

さすがリュウは地元民だけあって地理を把握している。すぐに城門まで辿り着くことが
できた。

城門には見張りが2人立っていた。門は閉まっている。

クリス「ほら、やっぱりダメでしょ。もう閉まってるわ。宿を探しましょう」

振り返るクリス。しかしリュウはとことこ兵士に近寄っていく。

「まだ開いてます？」

「君、すまないがもう今日は終わってしまったんだ」

と言った兵士が眉をひそめる。そしてそれはすぐ驚愕へと変わった。

「お、王子！！リュウ王子！」

飛び上がって愕く兵士。

だがそれ以上に驚いたのは俺たちだ。

「ハァ！？」と一斉に振り向く一同。

リュウは「ただいま」とにこにこしている「見張りごくろうさま。入ってもいいですか」

「も、もちろんです！」

乾いた喉が水を受け入れるような勢いで、門がすぐさま開け放たれた。

中に入るとすぐに大臣がやってきた。この国の召喚省の長官すなわちアルタレスを務める者のようだ。

「リュウ王子！」慌てた顔のアルタレス「今までどこでお遊びになられていたのですか。

王君が心配なさっておられましたぞ」

「すみません、ケートイアをほつつき歩いてました」と笑う。

「まったく、王子の放浪癖はあいかわらずですな」

「ははは。それで、王君はどこに？」

「奥でお待ちです。ときに……このお付の者は？」

「いえ、彼らは仲間です。えーと」チラッと俺たちを見てくる「まあ、友達みたいなものです」

「ほお、王子にご友人が……」

アルタレスは少し嬉しそうだ。きっと彼はリュウのことを小さいことから面倒見てきたのだろうな。

俺たちは王の間に通された。前方の玉座にはヒュート国王が座っていた。男子はナーシャ、女子はルーフをして挨拶をする。

オヴィ「あれが、ヒュート国王……」

ギル「流石は飛竜の王と呼ばれた伝説の竜騎士だ。貫禄もすさまじいものがある」

セレン「そうなのか……そうだろうな。見てるだけでビリビリ伝わってくるよ」

ひそひそ話す俺たち。

リュウ「父上、ただいま戻りました」

「おお、リュウよ。どこへ参っておった」

リュウ「はい、ケートイアへ」

「ケートイア。ふむ。いったい何をしに？」

「アデュへ行っておりました」

「そうか……」

王が一瞬静かになる。

「……やはりな。お前のことだからやはり黙ってはいないと思っておったわ。それで、何を見てきた」

「地獄を」

「……そうか。それで、お前はこれから何をするつもりだ」

「ケートイア王を滅ぼしたく存じます。まずはアデュ収容所の解放を考えておりました。それで収容所にしばらく潜伏しておりました。そこで彼らに出会いました。収容所を解放したのは彼らです」

「なんと」

「残るはケートイア王です。今こそ彼の王を滅ぼすときです」

「分かった。だがチームスからヒュートを守るため、国家特殊防衛部隊ヴァノヒュートは半数しか出撃させられん。半数でケートイアを守るヴァノケートにどう対抗したものか」

「その戦線」リュウが力強く言い放った「私たちアルシェの使徒にお任せを」

「アルシェの使徒？」

首を捻るヒュート王に、リュウは自らの運命を話した。

「なんと……お前がアルシェの末裔だということか。なるほど、お前の強さは彼らが原因だったのか」王は大きく頷いた。

「父上、ヴァノヒュートは半数で結構です。後は私たちが」

「あいわかった。ならばそうせよ。リュウ、今夜は遅い。運命をともにした仲間と夜を明かし、朝に発て」

「かしこまりました」

その後は食事会となり、閉会後はヒュート城内の大きな部屋が個室としてそれぞれにあてがわれた。

部屋で考え事をしていたら、男子が遊びに来た。すぐに女子も集まってきた。

リュウだけ来ない。オヴィとクリスが呼びに行くと、すぐ連れてきておしゃべりとなった。

オヴィ「しかしお前が王子だったとはな。驚いたぜ」

クリス「あんた、一言も言わなかったもんねえ」

リュウは「あはは、すみません」とごまかして笑う。

リディアが珍しく無言で、先ほどからうーんと考え事をしている。

「どうしたの、リディア？食べ過ぎた？おなか痛いのか？」

「ううん、大丈夫。気になってたの」

「何を？」

「……あのね、ヒュート国の人って、みんな飛竜に乗れるのかなあって」

と言ったら周りが一斉に笑い出した。

なんだかリディアの観点は人と違う。俺も「そんなことで悩んでたのかよ」と笑い、リディアの頭をぼんぼん撫でる。

オヴィが笑いながら「それで、みんな飛竜に乗って、飛竜で学校通って、夕方は飛竜の散歩するんだ？」と言うと、周りは更に笑った。

リディアはちょっと興奮した顔になって「え！？違うの！？」と言った。そしたらフルミネアまでプツと笑い出した。

「もー、リディアったら、マスコットみたいに可愛いんだから」と言ってクリスはリディアを撫でた。

<魚のまばたき>

mel 4 alis

こんな夢を見た。

思春期ごろの女の子が座っていた。地面に手を伸ばして何かしている。
黄色い長い髪をゆらゆらさせながら、手を動かしている。

「何をしているの？」と声をかけたら、俺を見て微笑んだ。眼が青い。

「かぎ」

女の子は地面を指差した。地面には扉があった。地下倉庫の入り口のように、地面に扉が付いていた。

「これ、どこに繋がっているの？」

「場所の問題じゃないの」

「つまり？」

「どこに繋がっているかなんてどうでもいいの」

「開くの？」

女の子の手に握られた小さな鍵を見ながら問う。

「ここで——」女の子は頭を指差す「開くのよ。鍵で開けるんじゃないの。この鍵じゃダメなの」

「ねえ、お兄ちゃん」ふいに呼ばれた。自分よりも大きい女の子にお兄ちゃんと呼ばれた。
こんな妹がいた覚えはないのだけど。

「この扉の中にあるのは、世界。見てみたい？」

「うん」と頷いた。

「じゃあ教えてあげるね」

女の子はスカートを押さえながら立ち上がった。

「この中にあるのは、魚のまばたき」

「魚？……魚がいるんじゃないくて、「魚のまばたき」があるの？」

「ほかにもあるよ。例えば、かえるのおへそ」

「蛙？ますます分からない……」

「もう」女の子は笑いながら俺に近づいてくる。息がかかる近さで話しかけてくる「お兄ちゃん、ばか、よく考えなよ」

「……？ほかには？ほかには何があるんだ？」

「そうねえ、黒い光もあるよ。猫の羽もあるし、時計の心臓も入ってる」

「それが世界を意味するの？それが世界なのか？」

「そう、それが世界と等価なの」

唇が触れそうなほど近くで話す女の子。吐息が温かい。

女の子はすっと俺の手を取ると、自分の腰へ当てた。

「全然分からないな。ほかには？」

「あとはねえ……」

そしてくすくす笑うと、俺の手を自分の尻に当てた。

「メルのしっぽ」

「や、やめろよ」俺は恥ずかしくて手を払った。女の子はまたくすくす笑った。

「嘘つけよ。尻尾なんかなくせに」

すると女の子はピタッと笑いを止めた。その視線に寒気を感じた。

「やっと気付いた？お兄ちゃん」

眼を細める女の子。俺は冷や汗が流れるのを感じた。恐怖や恥ずかしさが混ざったなんともいえない嫌な感じだ。

女の子は後ろを向いて歩きだした。俺は背中を眼で追う。

「あともうひとつ、扉の向こうに何があるのか、教えてあげる」

去り際に女の子が呟く。

「……何？」

女の子はピタッと止まった。少し斜め上をぼうっと見つめて止まる。

そして疲れたように呟いた。

「愛……かな」

<時魔導師メル>

mel 4 alis

ヒュート城内の個室で皆とべらべら喋りながら一泊し、朝を迎えた。
朝、食事を済ませると、俺たちは王に挨拶をして建物を出た。
大きな庭に出ると、既にヴァノヒュートが終結していた。彼らはリュウに恭しく挨拶すると、石になって固まったように起立して、若き王子の命令を待った。

リュウは静かに息を吸い込んだ。
「諸君、今よりケートイア王を滅ぼし、ケートイア国に平和をもたらす。
諸君の働きに期待する」
「飛竜に抱かれしヒュート国に栄光あれ！」
ヴァノヒュートの声がこだました。

俺たちは用意された飛竜に乗ると、空に飛び上がった。
セレン「うわあ、はーやい、はやい！」
オヴィ「すげえ、時速何トルメルフィあるんだ、こいつ！」
リディア「きゃー、飛ばされちゃうよ、セレン君！」
軽くて腕力のないリディアが悲鳴をあげる。
オヴィはニヤニヤ笑う「おーい、ちびディア、ユノを燃やして推進力を出せば吹っ飛ばされねえぞ」
リディア「それじゃ自力で飛ぶのと変わんないじゃん！オヴィ君のばかあ！」
セレン「リディア、俺の飛竜に乗りな。連れてってあげるから一緒に飛ぼう」
リディアは「うんっ！」と言って俺のところに跳んできた。
「腰に抱きつけよ。安定するから」
「うん、分かった」
子供みたいに——いや、子供なんだけど——しがみつくリディア。動物のひなみたいで、ちょっと可愛いなと思った。

いくら速いとはいえ、ヒュート国からケートイア国へはすぐ行けるものではない。国境線ならまだしも、首都ケートまではそれなりの道のりだ。
更に国境を越えて進入するのだからケートイア国の空軍ともぶつかることは必至だ。
事実、国境線を越えてすぐのところでケートイア空軍が襲ってきた。
ところが飛竜の国ヒュートとケートイアでは空軍の質が違う。ヒュート国の空軍はアトラスーだという。浮遊兵など、竜の業火で一網打尽だ。

だが敵の一部を取り逃がしてしまったため、ヒュートがケートイアに攻め込んでいるのは敵の知るところとなってしまった。

セレン「こりゃ道中休んでる暇はないな。寝ずにケートまで行かないと、大軍と野戦になっちまう」

リディア「え……でも竜さん休ませないと」

セレン「あ……そうか。そうだよな」

リュウ「ええ、竜の体力も無限ではありませんからね。そろそろ休みましょう。あその高い山に降りましょう。奇襲を受けにくい地形です」

リュウの指示に従って山に降りた。そこで救護班が来て食事の支度をしてくれた。戦地なので昨日のようにご馳走というわけにはいかない。だが戦闘の後だったので何でも美味しく感じられた。

「なあリュウ。いつ出発するんだ？」

「今日はもう日が暮れます。夜に飛ぶと暗くて危ないです。今日は止めましょう」

「え？空を飛んでるんだから暗くても平気だろ。空に壁なんかないだろ？」

「竜同士がぶつかって絡まってしまうんですよ。それに夜目の効かない子もいるんです」

「なるほど。じゃあ今日はここで野宿だな」

「いま野営地が用意されています。もう少し準備に時間がかかるのでゆっくりしていいですよ」

「そうか。じゃあどこか散歩にでもいくかな」

オヴィ「おいセレン、お前、食った後によく動く気になるな」

「落ち着いて座ってるの苦手なんだ。お前も行くか？」

「あーあー」オヴィは苦笑しながら手を横に振る。

リディアがゆっくり立ち上がる。

「お、リディア行くか？」

「んー、おしっこ……」

「あいよ……」

俺は1人で山を降りた。

この速度だと明日の朝過ぎにはケートに到着するだろう。開戦は昼前か……。

空を見る。綺麗な夕焼けだ。雨が降らなくてよかった。雨の中の進軍は疲れる。軽装な上に飛竜の速度で雨に当たったらものすごく濡れそうだ。そして風のせいで恐ろしく寒そうだ。

「確か、地図だとあっちがケートの方角だったような」

でも地図上だから相当遠いかもしれない。

「よし、いっちょ飛んでってみるか。就寝までに戻ればいいだろう」

俺はユノを燃やすと飛竜のように飛んでいった。アルシェの使徒の俺たちは常人よりも遥かに高いヴィードを持っている。そのため、飛行速度は常人では考えられないほど速い。

あっという間に目的の街へと着いた。

「けっこう遠くだったんだな。もうこれはケートの領内なんじゃないか……」

眩きながら歩く。結構都会だ。しまったな。こんなとこまで1人で来てしまった。

夜の街を当てもなく歩く。今ごろリディアはどうしているんだろうかなどと考えながら月を見る。

そのとき、ふっと懐かしい嫌な匂いがした。なんだ……これは。どこかで嗅いだことのあるような……そうだ、これは家の燃える臭いだ。

「火事か……」

ふと脳裏にリディアとの出会いが思い出される。辺りを見る。……アデルはいない。だが、代わりに人の叫び声が聞こえる。……なんだ？

角を曲がると、やはり家が燃えていた。人だかりができています。

中に入っていくと、豪華な服を着た男と兵士たちが燃える家を眺めていた。

(なんだ、こいつら……)

地面には1人の男が倒れている。ねっころがっているのではなく、地面に崩れこんで嘆いているように見える。

「かわいそうにねえ……」

「ありゃもう助からないよ」

ぼそぼそとおばさんの声が聞こえる。

「あの……何があったんですか？」

「ああ……またケートイア王の悪さだよ」

「ケートイア王？」

そうか、そこに立ってる偉そうな男。あれがまさに俺たちが討伐せんとしているケートイア王か。ヒュート国が攻め入っているというのにこんなところでいい気なものだ。今日は来ないとタカをくくっているのだろう。まあ実際アタリなんですけど……。

「そこの倒れてる男の人がいるだろう？ありゃこの家のご主人よ」

「ああ、それで項垂れてるんですか。でもそれとケートイア王に何の関係が？」

「燃やしたのが王だからさね」

「王が民の家を？」眉を上げる俺。信じられない。

「なぜ燃やされたんですか？」

「ご主人には娘さんがいてね。二人暮らしなんだ。とても仲が良くて娘さんも器量良しでさ。そしたら王が娘さんを家に閉じ込めてご主人を外に出し、家に火をつけたんだ」

「はあ？……なぜ？」

するとおばさんは嫌そうに首を振って去ってしまった。

だが俺の質問にはケートイア王が意図せずとも答えてくれた。
「愛する娘を失った父親の顔を見ながら酒が飲みたいものだわ」
(……は?)

側近らしき男がグラスにワインを注ぐ。
「おあつらえ向きに肉ももうすぐ焼ける。赤ワインにちょうど合うというものだ」
家の主人がもだえながら地面に崩れている。なぜこの男は動かないのだろう……。
「お前の娘は美味そうだな。後で少し分けてやろう。」

分かっておるな? お前が助けに入れば、たとえ助かっても親子もろとも処刑ぞ。娘は辱めを受けさせた後、生きたまま串刺しにしてくれる」

男は何も答えない。泣いているのか、ただ震えている。その顔を覗き込むと、王はけらけらと笑い出した。

「何をなくか。ケートイアの民がそのような軟弱な精神でどうするというのだ。」

幸い、予は寛大である。先ほどから言っておろう? この中の誰であろうと己の命を犠牲にしてお主の娘を助け出せば不問に処す——と。もっとも、この業火の中に飛び込む者がいればの話だがな」

「ぐう……」男は呻いて頭を垂れる。

(この野郎……)

俺は歯を食いしばった。しかし、凄い火だ。魔法で焼かれている上、まだ兵士が魔力をかけ続けている。これはただの火ではない。氷の魔法で相殺しながら入ったところでどれだけ持つか……。少なくとも俺のヴィルでは無理だ。

クソッ!

——地面を蹴りつけた。何がアルシェの末裔だ。市民 1 人救えなくて何がチームスを相手に戦うだ。

俺は首を振ると、ダッと走り出した。

できるかできないかじゃない。やるかやらんか、だ。

だが、一歩走り出したところで俺は慌ててブレーキをかけた。俺より一瞬早く、人が飛び出したからだ。

群集の中から飛び出したのは小さな女の子だった。

「お、おい! 危ないぞ!」

後ろから声をかける俺。だが女の子は火の中に飛び込んでいく。

今のは本当に小さい女の子だった。金色の長い髪にピンクのワンピース。どう見ても 5 歳くらいの体つきだった。

女の子は体の周りに青い冷気を放ちながら家の中へ入っていった。

「くくく、これはいい。今夜は色々な肉の味が楽しめそうだ」

王が笑う。

「ぐっ……」

俺は菌を食いしばると、再び駆け出した。ありったけのヴィルを出して兵士たちの火の魔法に抗いながら家の中に入っていった。

玄関をくぐったところで物凄い火の圧力に圧倒された。これはまずい。持ちこたえられそうにない。

「おーい！どこにいる！？助けに来たぞ！」

しかし返事はない。あたりを見回す。

「この家の娘と髪の毛の長い小さい子！返事をしてくれ！」

「ここよ！」

女の声が重なって聞こえた。よし、2人ともいるな。俺は声のした方に近寄った。すると先ほどの女の子がいた。ここの家の娘もいた。娘は足を折って倒れていた。落ちてきた棚にやられたようだ。

「お兄ちゃん！ありがとう！」

少女は俺を見るや、叫ぶ。

「もう大丈夫だ」

「このお姉ちゃん、足を怪我しているの。氷の魔法を張れても外まで歩けないのよ」

「はあ、なるほど。それで出てこれなかったのか。よし、俺が背負うよ。乗ってくれ」

しゃがむと娘を背負う。そして歩き出す。

だがあと数メルフィという距離で俺のヴィルが尽きる。

畜生、あと少しなのに……。

「vext, vind-ac anso！」

女の子が氷の魔法を強く放つ。俺の分まで魔法をかけてくれたみたいだ。それにしても強力な力を持った子供だな。

一瞬、この子も使徒だったりしてなどと考えたが、年があまりに離れすぎているので違うと悟った。

玄関を蹴り開けると、俺たちは外に出た。すると周りからは歓声が起こった。

俺が頬をほころばせた瞬間、後ろにいた女の子が「危ない！上！」と叫んだ。

反射的に見上げると、焼け崩れた家の柱が俺に向かって落ちてきていた。まずい、今からじゃユノを燃やせない。ヴィルも尽きている。直撃だ……。

「nial, evn！」

少女が何かを叫んだ。だが俺は馬車の前に飛び出した猫のように硬直して上を見ていた。こういうときは時間の流れが遅く感じられるものだ。落ちてくる柱が目に焼きついていやにゆっくり……。……。あれ？

ゆっくりすぎやしないだろうか……？

「お兄ちゃん、よけて！」

女の子が叫ぶ。俺はとっさに前方へジャンプする。するとタッチの差で柱が落下し、地面を打った。

女の子を振り返ると、彼女の額は青白い月の光を放っていた。そう、俺たちと同じように……。

「君……」

しかし女の子は俺の横を通り過ぎると、王に歩み寄った。

地面に崩れていた父親は、娘の姿を見ると半狂乱になって走り寄った。俺は娘を父親に渡すと、女の子の後を付いていった。

「ケートイア王、貴方の負けよ」

言い放つ少女。民衆はいい気味だとばかりに見ている。

「くっ……」ケートイア王は言葉に詰まった。まさか敗れるとは考えてもいなかったようだ「愚か者め。予は始めから民が民を救う勇気を持っているかを試していただけだ。何を勝った気でおる、小娘が。民は常に王の手の平の上で転がされているものよ」

「……」

「ふん、まあよい。すっかり興が醒めたわ。帰るぞ。明日はヒュートの愚か者どもを潰さねばならん」

ケートイア王は馬にまたがった。

「それにしてもヒュートの連中のおろかなこと。どうやって半分の手勢で予のヴァノケートに勝とうというのか」

不敵に笑いながらケートイア王は去っていった。

「はあ……やっと消えたか、クズが」

呟く俺の顔を覗き込む女の子。

「お兄ちゃん？」

「ん？なんだい」

「助けてくれてありがとお」

「そりゃ俺のセリフだよ。周りだって君に……あ、やべ。ねえ、一緒に逃げない？今つかまると英雄扱いで、おうちに帰れなくなっちゃうよ？」

「あ、うん」

女の子は頷いた。俺たちはこそこそと逃げ出した。角を曲がると小走りになってその場を去った。

現場から少し離れたところの噴水周りのベンチで、俺はこの小さな女の子と座っていた。

「はあ、星が綺麗だな。さっきまでの騒動が嘘みたいだ」

「ねえ、お兄ちゃんの名前は？」

「俺？セレンだよ。君は？」

「私はメル」

「メルか。そういえば、さっき俺に柱が落ちてきたとき、なんだか一瞬柱が止まったように見えたんだけど、あれは何だったの？」

「時間を止めたの」

「凄い魔法だな」

「えへへー」

女の子は得意そうに笑って脚をぷらぷらさせるが、舌足らずなのか、発音が明瞭でない。無理もないか、せいぜい5歳といったところだ。だがそれにしても他の5歳児の方がもう少しちゃんと喋れる気がする。

「なあメル。君はここに住んでるの？」

「うん」

「ここってどこの街？」

「けーと」

「あ、やっぱそうなんだ」

どうやら俺は王都まで飛んできていたらしい。

「あのさ、メル。君の額ってたまに光らないか？」

「え？わかんないよー」

「そうか……」

参ったな、相手が小さすぎてアルシェの使徒云々の話ができない。これは参ったぞ。しかしこんな思わぬところで使徒に出会えたのは幸運としか言いようがない。

<世界を撫でる少女>

おんなのこが座っていた。尻を付けずに足の裏で体重を支えている。
スカートを掴んで、折った脚の間に挟んでいる。

それはリディアだった。小さいころのリディア。出会ったころの彼女だった。
「リディア？」
思わず声をかける。彼女は地面に手を当てていた。

「何してるの？」
すると彼女はゆっくり答えた。
「触ってるの」
「……何を？」
「この世界を」

リディアは地面を撫でる。
「この世界はね、夢なの」
「夢？」

「そう——」
彼女は立ち上がると、手に付いた埃をスカートではたいた。
「——私たちを夢見る夢」

<ケートイア王討伐>

俺はメルに手を引かれ、彼女の家に案内された。この子は5歳くらいの小さな女の子で、つい先ほど出会ったばかりだ。

俺に落ちてきた柱を時魔法で止めたときに、彼女の額が光った。彼女も俺たちの仲間だったのだ。

彼女を使徒として勧誘するため、俺は彼女の親に話を付けにいった。

そこは木でできた小さな家だった。

「ここだよ、お兄ちゃん。入って」

中に入ると綺麗な女性が出迎えた。

「あら、おかえり、メル。……そっちの子は？」

髪が長く、メルによく似ている。とても綺麗だが細く弱々しげで、顔が白い。あまり具合がよくないのだろうか。

「こんばんは、僕はセレンといいます。さっきそっちの道で火事があった、この子がその家のお嬢さんを助けに入ったんです。そのとき偶々僕も飛び込んだもので、それがきっかけで知り合いました」

「そうだったの。メル、大丈夫だった？」

「うん、おかーさん」

メルはにこにこしながら椅子に座る。俺も手で促されて座る。

「それでね、お兄ちゃんがお母さんに話があるんだって」

「話？」

メルのお母さんはホットミルクを出してくれた。

「……アルシェの末裔？」

説明の途中で、お母さんはピクツとした。

「ええ、お嬢さんもそうなんです。額に紋章が浮かぶ子供なんです。彼女の額には幻字や使徒を意味する文字が浮かぶんです」

「そう……」とお母さんは蒼白になる。なんだろう……？

「あの……やはり親御さんとしては小さい娘さんがそんな運命を背負ってるというのは心理的にきついんでしょうか」

「ええ……そうね」あっさり肯定してくる。

「それは分かりましたが、お嬢さんがいないと人類はチームスに勝てないのです」

「チームス……」お母さんはコップの中で回るミルクをじっと見る「貴方達はすべての悪魔を滅ぼそうというの？」

「はい」

「……この世には世界の安定を担っている悪魔もいるのよ」

「え……？」

まいったな、この人は tetia（親魔派）なのか……？

「ユーマの民を害する悪魔だけは少なくとも倒します」

「そう……じゃあ害を与えない悪魔はいいのね」と少し胸を撫で下ろした様子。なんだろう、テティアではないのか？

「それで……唐突ですがお嬢さんの力を借りたく思うのですが」

「それは……できればさせたくないわ。急すぎるもの。私はこの子を手放したくない」

「そうですか……」

俺は俯いた。特に他に言うことはないな。これ以上交渉しても考えは変わるまい。

礼を言って去ろうとしたとき、ぎっと扉が開いた。

「じゃあ、1月に1度家に帰すっていう条件ではどうかしら」

そう言って入ってきたのはリーザ先生だった。

「先生！？なんでここに？」

驚いた。しかしお母さんを見るときもと驚いたようだった。急に誰かが入ってきたらそう思うのも無理はないだろう。

「セレン君、久しぶり。ちょっとケートに用があったの。さっきの火事のと時から見てたのよ」

「そうだったんですか。声をかけてくれればいいのに。あ、紹介します。この子はメルとって、使徒の一人のようです。で、こちらがお母さんの——」

お母さんを見ると、彼女は蒼白な顔で先生を見ていた。ますます幽霊みたいだな。

「どうも、あなたがメルちゃんのお母さんなのね」

「……はい」

「お嬢さんは私たちが責任持って面倒見るわ。だから力を貸してちょうだいな。月に1度はあなたの手元に帰すわ。世界のためよ、お願い」

「……はい」

驚くほどあっさりお母さんは答えた。流石は先生というべきか。子供の俺じゃ交渉にはならないってことか。

「後はメルの気持ち次第ですけど……」

メルを見ると、彼女は無邪気に「いいよ」と言った。

「いいの？あなた、私と離れ離れになっちゃうのよ？」

「寂しいけど、メルが戦わないとみんな死んじゃうんでしょ。じゃあやらないと。それに、帰ってこれるんでしょ？」

「……そう」

お母さんは寂しそうに呟いた。メルの髪に手櫛を入れると、ぎゅっと抱きしめた。

その後、メルの荷物をまとめ、お母さんは娘を先生に託した。

「明日、ケートにヒュート軍が侵攻します。市街に危害は加えませんが、飛び火がこない保障はないので、今夜のうちに避難してください。メルは明日の戦線には立たせません。陣地で保護しますのでご心配なく」

「分かったわ。娘をお願いね、セレンさん。この子を守ってあげてください」

「はい」

俺は小さいメルの手を取って、先生と3人でケートを後にした。

「メル、しっかりお兄ちゃんにつかまってるよ」と言って飛ぶと、メルはきゃっきゃとはしゃいだ。

「お兄ちゃん、はやーい！ヴァノケートみたい！」

「アルシェの末裔だからな。メルもそのうちこれくらい速くなれるよ」

「ほんとーお？」

「ああ」

野営地の山間部に飛んで帰ると、リディアたちのところへ行った。

「セレン君！？どこ行ってたの。心配したよー！」

慌てて飛んでくるリディア。

「悪い悪い。ちょっとケートまで行ってた」

「ケート！？」

1オクターブも声が高くなるリディア。俺は顔をしかめて首を引いた。彼女の声はうるさすぎる。

「むー、でも無事でよかったよ。で、その背中の子は誰？あと、なんで先生と一緒になの？」

「この子はメル。使徒だよ。ケートで会ったんだ。これから同行する。先生は……そういえばなんでケートに来てたんですか？」

「んー、用があったのよ。みんなの顔を見たら帰るわ。明日は戦争、がんばってね」

戦争がんばってって言い方面白いなと思いながら俺は「はい」と答えた。

先生が帰り、メルをみんなに紹介した後、テントで寝ることになった。メルは人に慣れていない状態なので、少し不安そうだった。

女子と一緒に寝かせようかと思ったが、俺に懐いているようなので、呼んで寝袋に入れた。俺も結局は子供なので大人用の寝袋があれば2人入る。

「メル、誰かと一緒に寝るのははじめて」

「そうか。メルってお母さんと2人暮らしだったの？」

「そうよ」

「お父さんは？」

「しらない。見たことない」

「兄弟もないのか」

「いないよ。友達もない。でも今日はお兄ちゃんができたからうれしい」

「そうか」俺は微笑んで黄色い髪に手櫛を入れた。メルは子猫のように擦り寄ってきた。

朝起きたらかなり寒かった。もう冬だもんな。山間部の朝は冷える。

寝袋でメルをぎゅっと抱きしめたら暖かかった。

「お兄ちゃん、あたたかーい」とメルが呟く。向こうにとっても人肌が温かいようだ。不思議だな、ともに冷えてるというのに。

しばらくそうしていたが、だんだん目が醒めてきたので寝袋から出た。テントの外にはまだほとんど人がいなかった。早く起きすぎたのだろうか。まだ空が薄暗い。

「お兄ちゃん、メル、おしっこ」

「ああ、じゃあ川に行こうか。水も飲みたいし」

メルの手を引いて川へ行く。川に行くと顔を洗って水を飲んだ。メルは俺をじっと見て、真似をしようとする。川で顔を洗うのははじめてのようで、戸惑っている。川に足を突っ込まないようにビクビクしながら指先を水面につける。水を怖がる猫のようだ。

「いいよ、やってあげる。ここにしゃがんで首を出して」

メルは言われた通りにした。水を取って顔を洗ってやる。面白いことに水を飲もうとしている。

「メル、飲むのと洗うのは別だよ。後で飲ませてあげるから」

「うん」

メルの顔を洗うと、水筒に水を汲んで飲ませた。こくこくと飲む。小さいひなみたいだ。

「メル、おしっこ」

「はいはい。ここでしていいよ」

「……どうするの？トイレ、ないよ」

「あ、そうか。メル、トイレ以外でしたことないのか」

「ないよ」

「へえ、ケートって都会なんだな。いや、アルバザードも同じか。単に旅をしたことがないってことか。こりゃ、一から俺が世話しないとだな」

「……もれそう」

「あ、ちょっと待って。立って立って」

メルを立たせると、スカートに手を入れてパンツを下ろす。

「川もトイレも同じだよ。こう立って……はできないのか、持つところないもんな。まいったな、女の子ってどうするんだろう。俺には妹もないし……。ちょっと待って。リディアかクリス連れてくる」

「え、待てないよ。立ってするの？しゃがんでするの？」

「立ってするのが無理ならしゃがむんじゃないのかな」

「でもしゃがんだら川に落ちちゃいそう……」

「そうだよな。じゃあお兄ちゃんが持っててやるよ」

俺はメルを持ち上げて、しゃがんだ。膝の上に乗せ、両脚を抱えて、脚を広げる。ワンピースのスカートをたくしあげ、川に向ける。

「はい、していいよ」

メルは言われた通りにした。俺、何この年で父親みたいなことしてるんだろう。いや、兄か。そうだなあ、妹ができたって考えればいいのか。

思えば女の子の体がどうなってるかなんて今この瞬間まで知らなかったな。こんなまじまじと近くで見たことはなかった。へえ、こうやってするんだと思って見ていた。人類の半分は女なのに、今まで特に疑問も抱かず生きてきた自分が不思議だった。

それにしても右や左やあちこちに飛び散るもんだな。脚にもかかるし。男と違って支えがない分、不便だ。

そんなことをぼーっと考えてたらメルが「終わったよ」と言った。

「終わった後、振るのか？あるいは女の子は水かけるのか？」

「ええー？こんな冷たい水かけたら、メルしんじやうよー」

「そうか、じゃあ全身を振っとくか」

俺はメルの身体を上下に軽く振って水を切ると、パンツを履かせてテントに戻った。

「山じゃ下着も服も汚れちゃうな。綺麗なワンピースなのにもったいない。アルバザードに戻ったら服を買ってやるからな」

「うん、ありがとう、お兄ちゃん」

テントに戻って食事となった。

メルは本当にお母さんと静かに暮らしていたようで、何一つ身の回りのことができなかった。食器の使い方も見慣れないものは分からないので、俺は教えていった。

俺は人に教えるのが好きじゃない。まどろっこしいし、面倒くさい。教えるのはイライラして苦手なのだが、メルには苦痛を感じなかった。どうも俺はこの子を守るべき妹として認識したらしい。

食事を済ませたらヴァノケートと会議をして進軍となった。予定どおり進攻し、午前中にはケートを叩くとのことだ。

俺たちアルシェの使徒も飛竜で攻め入ることになった。ただ、メルは戦線から離れ、野営地に残すことにした。メルは不安がって俺に付いてこようとしたが、お母さんとの約束だ。連れて行くわけにはいかない。

俺はメルの頭を撫でると、リディアを乗せて飛竜を飛ばした。

飛竜が飛ぶ。しばらくするとケートの街が見えてきた。ヴァノケートの姿は見えない。

どういふことだ。守る気がないのか。

俺たちは難なくケートに侵入した。目の下にメルの家が見える。

「リディア、あれがメルの家だ」

「へえー。メルのお母さんは大丈夫かな」

「もう逃げているはずだ」

「人が見えないね」

「隠れてるか、メルのお母さんが知らせて逃げたかしたんじゃないか」

「だといふけど……」

城が見えてきた。

「皆、戦闘態勢に入りなさい！」

リュウの呼びかけに応じてヴァノヒュートが声をあげる。するとそれに呼応したように城から兵士たちが出てくる。

ギル「ヴァノケートだ！」

魔道士の服を着た魔法兵が火の玉を放ってくる。流石は国家防衛部隊、威力の桁が半端ではない。飛竜にユノを張って守りながら突っ込むが、魔法はユノを破って飛竜を燃やす。次々と空中で打ち落とされて飛竜が悲鳴を上げる。

「メルを連れてこなくて正解だったな」俺は剣にユノを込めて火の玉を切り裂いた。

火の玉は赤いマグマのようにばらけ、飛竜の翼にかかる。だが飛竜にかけた青いユノにぶつかると、花火のように弾けて消える。

青いユノのバリアに当たって砕け散る赤い炎。それは美しい光景だった。特にユノにあった瞬間、ユノが反応して青い光を強く放つのが美しい。蛍が舞っているかのような光景だ。

だがこれはあくまで戦闘だ。容赦なく炎に包まれ戦死していくヴァノヒュートたち。俺は歯をくいしばったまま飛竜で突撃していく。

オヴィ「突っ込むぞ！」

オヴィは飛竜の頭に乗ると、斧にありったけのユノと雷を乗せ、飛竜ごと城壁に突っ込んだ。斧で城壁を破碎すると、ヴァノケートをなぎ倒して城内に入る。

「さすがオヴィ！無茶な特攻しやがる！」ギルが口笛を吹く。

前線の俺たちはオヴィが空けた穴に向かって突っ込んでいく。ヴァノケートは前衛にいた魔法兵を引き下げると、白兵を前線に出した。

城の高い城壁で剣士たちが襲ってきた。

「リディア、下がってろ。魔法で支援してくれ」

「わかりました！」

ぴょんとリディアが後ろに跳び、敵に向けて後方から魔法を浴びせる。

「フルミネア！」俺は剣を抜く。

「ここに！」

「前線はまだ誰も怪我をしていない。後ろに戻って、落ちた飛竜の中から怪我人を助けろ」

「はい！」

フルミネアはユノを燃やして飛んでいった。

クリス、オヴィ、ギル、リュウ、俺の 5 人が武器を持って剣士たちに襲い掛かる。何度斬り付けてもヴィードが多いので中々倒せない。また、後方の魔法兵が邪魔をして戦いにくい。

だがこちらには後方にヴァノヒュートがいる。後方支援はバッチリだ。

アルシェの使徒は戦闘力が高く、次々とヴァノケートを倒していった。何十人もいた国家の選りすぐりを倒すと、俺たちは玉座へ迫った。

「ケートイア王！」

玉座には昨日の夜見たケートイア王が座っていた。不機嫌そうな顔だ。

「どういうことだ。半数の手勢で我がヴァノケートに勝てるはずがなからう」

「その答えは俺たちにある」剣を王に向ける。

「貴様ら……ヴァノヒュートではないな。何者だ」

「俺たちはアルシェの使徒だ。チームスを倒すために生まれた。だが今はチームスに乗じて国を荒らす暗君を斬るのが目的だ」

「くらだぬ……」王は剣を取って立ち上がった。

そのとき、「王様！」とヴァノケートの 1 人が入ってきた。

「なんだ……」

「ヴァノケートは壊滅状態にあります。速やかに停戦命令を！」

「そうか」

すると王は手に持った剣をブンと振った。青いユノが鋭い刃になってヴァノケートを真っ二つに斬り捨てた。ヴァノケートは悲鳴をあげる間もなく死んだ。

「なっ！」

驚く俺に王は冷ややかな笑みを見せる。

「クズは不要だ」

するとギルが一步前を出て笑う。

「じゃあお前も不要ってことだな」

「なんだと？」

王が剣を構える。

ギルがユノを燃やして突っ込む。だがあっさり剣で受け止められ、斬られる。王の力は凄まじく、ギルは一撃でユノの大半を奪われ、床に落下した。

オヴィ「ギル！……くそ！」

オヴィが斧で突っ込む。斧で王を斬りつける。斧がクリーンヒットした。よしと思ったのも束の間、王は顔色ひとつ変えずにオヴィをユノで吹き飛ばした。

クリスがそれを見て爪で突っ込む。王が剣を振ると、巧みな身のこなしでかわし、爪を王の首に立てる。

その瞬間を狙ってリディアが魔法を放ち、リュウが刀で切りつける。だが王は剣を大きく振り回し、四方八方にユノの雨を降らせた。剣が振り回されるたびに剣から弾雨のようにユノが降り注ぐ。間合いに入ったクリス、リディア、リュウは矢も盾もたまらず地面に倒れた。

そのとき、後方からフルミネアが帰ってきた。

「セレン……これは……」

「まずい、フルミネア。思ったより強いぞ、こいつ。皆を早く回復してやってくれ」

「はい」とフルミネアが魔法を唱えだしたとき、王が剣をフルミネアに向けた。

「vort, miba. ketta, kapel」

王が唱えると剣の切っ先からユノが光線のように撃ち出された。それはあまりに細く、速かった。フルミネアは気付かないうちに右肩を撃ち抜かれ、地面に沈んだ。

「残るは貴様だけだな」

「くっ……」

俺は剣を構える。王が剣を向ける。まずい、またあの光線だ。

避けようとしたが体が動かない。

——そのときだった。

「tix!」

甲高い声とともに空間が歪んだ。すると王の動きが急にゆっくりになった。俺は光線を避ける。

なんだ今のは。敵の時空を操ったのか？こんなことができるのは……。

俺は声のしたほうを振り向いた。目の先にはメルがいた。やはりそうだったか。

「メル……お前どうして」

「メルだってアルシェの使徒だもん！」

「そうか……」

「お兄ちゃん、早く倒して！もう魔法が持たない！お願い、ケートイアを救って！」

「任せろ！」

俺は剣を取ると、ありったけの力でケートイア王を刺した。心臓を貫かれたケートイア王は断末魔の声をあげて倒れた。

残っていたヴァノケートの連中はそれを見ると離散した。当然のことながら、なんと忠誠心の低いことか。ヴァノヒュートは敗走兵を追うこともなく、鬨の声をあげた。

フルミネアが自分と怪我人を回復した。

生き残ったものは王の間へ集まり、勝利宣言を出した。
ケートイアの悪王は倒れた。アデュの惨劇はこれでもう起きない。
ケートイア国は救われたのだ。

<飛竜のコーマ>

俺たちは飛竜に乗ってヒュートに帰還した。ヒュート王に報告を済ませると、その日は宴をした。

だが次の日には早々に発った。ケートイアは救われたが、異性魔王アシュがアルバザードを狙っているのだ。のんびりはしてられない。早くアルバザードに帰らなければ。

ヒュート城を出たところでリュウが大きな飛竜を呼んだ。

「これに乗って行きましょう。歩いていくとアルバザードまでは大変です。馬でもいいですが、山間部では時間を食われます。空が一番早いですよ」

オヴィ「さすが飛竜の国だな。言うことが違え」

リディア「あれ？この子、前に空から落ちた私を助けてくれた子じゃない？」

クリス「見分けつくの？」

リディア「うん、よく覚えてるよ」

リュウ「この子はコーマといいます」

メル「わー、すごーい！かっこいいー！」

メルがびよんびよん跳ねて喜ぶ。

「お兄ちゃん、だっこだっこ！」

「はいはい」と言ってメルを飛竜の首に乗せてやる。メルは首にぴとっと小動物のようにへばりついてもぞもぞする。かわいいなあ。

「かっこいいー、かわいー！」

すっかり飛竜が気に入ったメル。すると突然誰かが「ありがとう」と言った。

「ん？」

俺たちは顔を見合わせる。

オヴィ「今の、誰の声だ？」

コーマ「僕です」

オヴィ「うおうっ！ひ、ひりゅうが喋ったぞ！」

コーマ「僕は言葉を喋れます。ヘンですか？」

「ヘンだけど、いいことじゃないの」ギルが笑う。

コーマ「よかった。皆さん、よろしくお願ひです」

メル「わー、あなた喋ることもできるのね。ステキよ！大好き！メルと仲良くしてね」

コーマ「はい、メルちゃん。仲良くしてください」

フルミネア「でも、どうやって一緒に暮らしましょうか。大きくて家に入らなそうですね」

コーマ「それじゃこの姿はどうですか」

コーマはメルをおろすと、光を放った。後に残ったのは小さな犬。少し高い声で喋る犬。

「犬になってみました。これで一緒に暮らせますか？」

「きゃー♪」メルが悲鳴にも似た歓喜の声をあげてコマを抱きしめる。よっぽど気に入ったんだろうな。もう言葉になってない。

飛竜に戻ったコマに乗って、俺たちはアルバザードへ帰った。あれだけ長かった道が随分短く感じた。

<執事アンジュ>

アルバザードに戻った俺たちは家を探した。仲間が増えてきてサプリには住めなくなってきたからだ。

リディアは寂しがっていたが、引越しには協力的だった。話し合いの結果、学校に近いアシェルフィにしようということになった。

アシェルフィの中央にある泉。その南西に学校はある。サプリはさらにその西だ。今度引越すところはアシェルフィの泉の東側がいいということだ。先生が場所を見つけてきてくれた。

泉の東は長い道が続く。東に向かって進むと左手が森だ。この森は深く危険なので地元民はなるべく避ける。犯罪も多い。

その森に入らず、ひたすら道を進むと大きな空き地がある。そこに家を建てようということらしい。

ところが俺たち孤児には金がない。先立つものがなければどうにもならない。それで引越しは随分先の話だろうと考えていた。

だがリュウが——さすが王族というか——資金を調達すると言い出した。

これに素直に従えば良いのに、仲間から金をもらうことに抵抗を感じた皆は従わなかった。自分たちの家は自分で建てようと言い出した。

リュウ「じゃあどこからお金をもってくるんです？」

リディアの家で会議をしている俺たち。リュウがため息混じりに問うた。

するとリディアが「トレジャーハンティングだよ！」とはしゃぎだした。

オヴィ「宝探しか。でも、どこに宝があるんだ？」

「アルカンス！」とリディアが即答した「スレア、ブレア、トレアの隠した財宝があるって噂じゃない」

ギル「どっちかっていうと都市伝説だと思うけど」

リディア「でも行っただけ行ってみようよ。きっとある。だってラヴァス終結の土地だし」

フルミネア「まあ、そこに新しい使徒がいれば幸運ですしね」

そういうわけで俺たちはアルカンスまで行くことにした。コマが仲間になってからというもの、移動が早くて助かる。前みたいに歩いていくともなれば大変なことだ。

コマに乗ってアルカンスへと向かった。

「わー、ここがアルカンス」リディアが感動したような声を出す。

アルカンスは神々の戦争ラヴァス終焉の地だ。後に有力な 3 人の王、スレア、ブレア、トレアが覇権を巡って争ったが、三つ巴になり、ついに決着は付かなかったという。

フルミネア「なんだかヴィードの多い土地ですね。雰囲気違います」
クリス「あんた、敏感ねえ」
リディア「それにしても何もないね。大きな街があるかと思ってた」
リュウ「結局ユーマ 8000 年の時代から何も変わってないということですね。誰もこの覇権は取れないようです」
フルミネア「陸の孤島ですね」
ギル「さて、リディア。この荒れ野のどこに宝があるんだ？」
リディア「う……。でも、噂じゃ鉱山や砦の跡地にいっぱい宝物があるって話だもん」
オヴィ「じゃあその砦に行ってみるか」

そこからはしばらく歩いた。当時作られた道の跡を手がかりに、どこに砦が築かれていたかを逆算し、探していった。

しばらくすると砦の跡が見つかった。

オヴィ「ここか……」

クリス「でもこんなところに置いてあったらとっくに取られてるはずよね」

リディア「きっと隠してあるんだよー」

ずかずか入っていくオヴィとリディア。メルが俺の袖を引っ張って立ち止まる。

「どうした、メル？」

「こわいの……お兄ちゃん。メルを守って」

「うん、おいで」

メルを抱っこして中に入っていった。オヴィは目を細めて俺を見る。

「なあ、お前、甘やかしすぎじゃね？」

「そうかな。まあほんとならお母さんと一緒にいる時期だし、しょうがないよ」

「まあ、そうだな」オヴィは頭を掻いて歩き出した。

中に入って少ししたところで、異変に気づいた。

「セレン……」クリスが呟く。

「なに？」

「気づいてる？」

「……敵か」

「囲まれてるわ」

「さすがノアが鋭いね。で、数は？」

「分からない。でも私たちが囲める人数よ」

リュウ「では既に財宝が盗掘されてる可能性が減りましたね。いやー、よかったよかった」

オヴィ「笑ってる場合かよ。皆、ヴィードを高めろ」

その瞬間、四方八方からユノが打ち込まれた。俺たちはユノを球形に張り巡らせ、バリ

アを作った。

砂埃が舞い上がり、一瞬視界が悪くなる。

ギィっと奇声を上げて小さなアデルが飛び掛ってきた。早い。俺は咄嗟に剣で相手のナイフを受け止める。左手にはメルを抱えたままだ。

「リディア、こいつらは？」

「ヴァイガン……ヴェイグが語源よ」

「なるほど、ヴェイグっぽい人って意味か」

ヴェイガンが影から何十匹も出てきた。こんなにいたのか。どれもナイフを持っていて、角が生えている。子供くらいの大きさしかなく、背が丸まっている。

「セレン、俺が北をガードする。ギルが東、お前が南、リュウが西を守れ。女子は俺らの円の中で支援しろ」

「すまん、メルがいるから前衛は無理だ」

「メルを置いとけよ」

「そういうわけにはいかねえよ」ナイフを持って飛び掛るヴェイガンを蹴り飛ばす「メルを置き去りにしたら、怖くて泣いちゃうだろ」

「あー、もう！」オヴィは髪をかきむしる「クリス、託児所になれよ！」

「メル、お兄ちゃんがいい！」既に半泣き状態だ。

クリス「仕方ないわね、私が前衛に出るわ。セレン、下がってて」

セレン「……悪い」

彼らが描く円の中で俺は待機していた。時折円の中に入ってくるヴェイガンを相手に片手で戦う。メルは俺の左腕にしがみついている。

「メル、落ちるなよ」

「はいっ！」ぎゅっとさらにしがみつくメル。本当に小動物みたいだなあ。

オヴィたちの善戦のおかげでヴェイガンは倒れて行った。俺は円の中で敵の動きを見ていたのだが、先ほどから気になる奴がいる。灰色の髪をしたヴェイガンで、何もせずに見ているのだ。あれは何なのだろう。敵意を感じない。

結局最後までそいつは残った。オヴィが詰め寄るが、やはりそのヴェイガンは身動きひとつしない。

オヴィ「……おい、お前、なぜ動かない」

「……」

ヴェイガンは何も言わず、静かな目でオヴィを見ている。

オヴィ「襲ってきたのはお前たちだ。斬るぞ」

そのときメルが「待って！」と叫んだ。オヴィがチラとこちらを見てくる。

「その人、はじめから戦う気なんてなかったよ！殺さないであげて！」

オヴィはヴェイガンを見る。少し迷っていたようだったが、斧を収めた。

「行けよ、敵じゃないなら斬る必要はない」

するとヴェイガンはゆっくり口を開いた。

「何をしにきたのですか、アルシェの使徒たちよ」

「え……？」

皆の眼が彼に集中する。俺はざっと前に出る。

「どういうこと……。なんで俺たちがアルシェの使徒だって知ってるの？」

クリス「まさか……ヴェイガンのあんたがアルシェの使徒？私たちの仲間？」

フルミネア「使徒は人間だけとは限らないのでしょうか」

リュウ「ヴェイガンさん、あなたの名前は？」

「アンジュと申します。アルカンスの守人をしておりました」

セレン「アルカンスを？」

「賊が荒らしにきますものでな」

「なるほど。じゃあさっきのヴェイガンは斬ってはまずかったのでしょうか」

「彼らは人間を食うために襲っただけです」

「そうか……かえって安心しました。俺たちはアルカンスに宝を探しにきたんです。ここにあるんですか」

「どういったものを宝と呼んでいるのですか」

「家がほしいんです。それには資金がいるんです。それで宝探しに来たんです」

「ああ、金銀財宝のことですか。なら守るまでもありませんな。どうぞこちらへ」

アンジュに案内されて行ったのは、床も壁も水晶でできた部屋だった。

「財宝は必要なだけ持って行ってください」

「……いいんですか？」

「アルシェの使徒が使う分には問題ありません」

「ところで、なぜ俺たちのことを知ってるんですか？」

「……」アンジュは答えない。答えたくないのだろうか。無言は困るのだがな。

「あなた方は旅がちのようですが、新しく買う家の管理は誰が行うのですかな」

オヴィ「おっと、それは考えてなかったな。食事や掃除は当番でやるにしても、限界があるな」

クリス「それに小さなメル世話もセレンだけじゃ心もたないわ」

「では私めが執事として参上しましょう。メル嬢のこともお任せください」

セレン「ええ、それはありがたいですが、急ですね」

「アルシェの使徒に仕えることが私の望みなのです」

「そうですか……」俺はゆっくり答えた。

<アシュの黒い城>

mel 3 xier

俺たちはアルカンスで手に入れた財宝を売って家を建てた。アシェルフィに一軒家を買って、皆で移り住んだ。

アシェルフィで俺たちはいつでもアシュの攻撃に備えられるよう待機していた。

この日、リディアが血相を変えてリビングに入ってきた。

「セレン君！」

「どうした、白い顔で」

思わず立ち上がる。左隣に座っているメルが不安そうな顔で俺の袖を握る。

「アシュが攻めてきたの！」

オヴィ「ついにか」

ギル「相手の戦力は？」

「アデルがたくさん！1000匹くらい！でもね、アシュはいないようなの」

フルミネア「自分の城で待機ということですか」

リュウ「城がもぬけの殻のときに攻め込まれたくないからでしょう。ですがそれだけの数ということは、城で抱えているアデルのほぼ総数が出てきていてもおかしくありません」

クリス「つまり、城はアシュが一人ないし少数の側近と守ってるってことね」

セレン「なるほど、そういう状況か。分かった。みんな、戦闘の準備だ」

ギル「で、どっちを目標にするんだい？城？アルバザードの防衛？」

セレン「両方だ」

オヴィ「セレン、戦力を分散してる余裕はねえぞ」

セレン「だが、アシュを討つ絶好の機会でもある。かといってアルバザードの防衛をしないわけにはいかない」

多分反対されるだろうなと思いつつ言った。みな分かっているからだ、アシュには恐らく勝てないと。アシュの強さは知っている。以前も教室で一撃で殺されそうになった。まともに行けば今の強くなった俺たちでも適うまい。

ただ、アシュを道連れにというなら話は別だ。道連れにするならできる。生還は無理でも。

問題は、アシュを道連れにできるほど強いのは誰かということだ。そして、何人を犠牲にするかということだ。

だが、こうでもしないと恐らく俺らは皆殺しだ。いまアデルがアルバザードを攻める。俺たちは恐らく防衛に成功するだろう。だが、疲弊したところにアシュが来たらどうだ。勝てっこない。皆殺しだ。だが、はじめから手薄なアシュを狙えばどうだ。誰かが犠牲に

なってアシュを倒せば、皆死ななくて済む。

俺はゆっくり息を吐いた。

「アシュを攻撃する部隊と、アルバザードを守る部隊に分けよう」

オヴィ「正気かよ。いま攻撃部隊を出したら、防衛部隊も手薄になって、どっちも共倒れだぜ」

セレン「だから攻撃部隊を最小限にする」

オヴィ「あん……？」

セレン「……俺が、行く」

皆の動きがピタッと止まった。

クリス「それ……あなた、どういう意味で言ってんのよ」

少し怒ったようなクリスの声。

セレン「だが、ほかに手はないだろう？配分を誤れば皆殺しだ」

そのとき、リディアが突然大声を張り上げた。

「ダメだよ！」

甲高く大きな声にみなが目にした。

「リディア……」

リディアはつかつか歩み寄って俺の腕を取って胸に抱いた。

「セレン君、アシュと心中する気でしょう！そんなこと許すはずないじゃない！」

「心中する気なんかねえよ」と笑った。嘘だけど。

「嘘！私、嘘は嫌い！」泣き出すリディア。

「んー」と呟きながら剣を腰に差す。答えに詰まると「んー」と流すのが俺の口癖だ。

「んーじゃなくて！何準備してんのよ！一人でなんて行かせないからね」

「大丈夫だよ、帰ってくるって。仲間を信じろよ」

「嫌！」リディアは大口を開けて叫ぶ。涙を零して腕にしがみつく。こいつ、こんなに感情が昂ぶるやつだったっけ。珍しいな。

「なあ、そんなに俺が心配か？」

「心配だよ」

なんだろう……それは仲間としてという意味なのだろうか。それとも男としてという意味なのだろうか。そういえばリディアは俺のことをどう想っているのだろうか。俺は……。

……俺は。

リディアの細い腕を掴んだ。そのままじーっと顔を見ていた。リディアは緑の瞳で見返してくる。俺はふっと笑うと、その腕を引いた。くいとリディアが引っ張られる。俺はリディアを抱き寄せると、頬に唇を触れた。

「……」

リディアがピクッと目を開く。そのまま言葉を失って止まる。どんな顔をしているのだろうか。俺からは見えない。

唇を離すと、リディアはきょとんとした顔をした。なんだかな、小さな猫みたいな子だ。
俺はふっと笑うと、リディアの頭を撫でた。

「いい子だ……」

「……ばか」

リディアは赤い目で呟いた。

俺は一人で家を出ると、アシュがいるザミアの森まで飛んでいった。途中、アデルの行進とぶつからないよう、迂回をしていった。

残されたリディアたちが心配だ。だが、それよりも今は自分が生きて帰ってこれることを考えよう。一番危険なのは俺なのだから。

ザミアの森は閑散としていた。魔物の気配が弱い。邪気が少ない感じがする。

俺は緊張して唾を飲み込んだ。森へ足を踏み入れる。

中には誰もいなかった。カラスが鳴いている。奥に行くほど虫が多くなり、不快だった。一番奥に行くと、アシュの城があった。

誰もいない。門番さえいない。しかも開門している。大した度胸だ。

正面から入っていく。歩いて、本当に観光客のように城内に入った。

畏かと思ったが、誰もいない。やがて廊下に辿り着いた。王の間へと続いているようだ。そのまままっすぐ歩くと、大きな扉があった。

重い扉を手で開けると、そこにはアシュがいた。相変わらず肩の凝りそうな重い甲冑を着ている。

「……なにゆえ汝がここにいる、セレン」

「意外そうだな。ならもっと驚けよ。リアクションに乏しいんだよ、悪役ズは」

「アルバザードの守りはどうした」

「アルシェの使徒が守ってるよ。お前、よく一人で入れたもんだな」

「脆弱な現代の王と違い、我は一騎当千に値するからだ」

「ごもつとも」

「どうやら犬死しにきたようだな」

「いいや、それは最も違う選択肢だ。まず、俺だけが死ぬというのがハズレ。どうせならお前も道連れにする。だが、正解は、俺が生きてお前が死ぬ、だ」

「アシェルフィでの惨敗を忘れたわけではあるまい？」

アシュが剣を手にもち上げる。俺も剣を構えて立つ。

「てゆうか一番驚いたのは、戦闘を予想してないのに鎧を日常的に着てたことだな。どんだけ変人なんだよ」

「減らず口を」

アシュが剣を振る。青いユノが刃となって襲い掛かる。

「こんなもの、一々受けてられっか」

避けてしまえばどんな攻撃も無力だ。横に跳ねて避ける。轟音がして後ろの壁が吹き飛んでいく。城がグラッと揺れた。

「家を壊していいのかよ？」

しかしアシュは無言で剣を振り続ける。だが俺はそれをすべて避ける。ユノを撃つのはタダじゃない。ユノを随時消費している。こうしていけばいずれ相手のユノは尽きる。こいつは一撃必殺の勢いでユノを撃ちまくるから、消耗は早い。

こちらの戦略に気づいたか、アシュは剣にユノを帯びて突撃してきた。剣を合わせ、鏢迫り合いに持っていくが、相手の力の方が強い。う、まずい……。

俺はユノを全身から噴出した。大量のユノを消費するが、相手は目くらましを受けたように身じろぎする。そこに前蹴りを放ち、アシュを吹き飛ばして間合いを取った。

「俺は死なないぜ、アシュ。こんなんじゃ埒が明かない。総力戦だ」

俺の額に紋章が浮かぶ。ヴィードが全身を駆けめぐるのが分かる。ヴィードが全身を駆けめぐる感覚は体の柔軟性に近い。

朝起きたときに柔軟体操をするとあまりに硬くて驚く。だが、運動後に同じ柔軟をするとさっきまで届かなかったのが嘘であるかのようにスッと届くようになる。俺の紋章もそれに似ている。この状態になると、なぜ先ほどまではあんなに少ししかヴィードを撃てなかったのかと不思議に思うようになる。

俺は全身のユノを手の平に集めた。アシュは剣を構え、ユノを剣にこめる。

「来い、アシュ！アルバザードは俺が守る」

「忌々しいアルシェの末裔め！」

アシュが全身で飛び込んでくる。青い隕石が突っ込んできたかのような威力だ。俺はありったけのユノに氷の魔法を乗せて撃つ。すべてを薙ぎ払い、残った地形を氷で覆う俺の必殺技——pamilvolk だ。

この技はフルミネアに出会った後、アデュへ行く前に出会った老婆から教わったものだ。いきなり現れて、俺たちに技を伝授して去っていった。名前も名乗らず、「ばあさん」と呼べとだけいていた。そして俺たちに技を教えるとさっさといなくなってしまった。

さて、このオーロラが俺を救ってくれるかどうか。

いずれにせよ、このオーロラで競り負けたら俺の負け。みんなとはお別れだ。

俺はありったけの力でオーロラをアシュに打ちつけた。力を出し切ったところで意識が途切れた。最後に見えたのはアシュが俺の青いオーロラの中で剣を前に突き出して怒号をあげている映像だった。

<沈黙のラルドゥラ>

——目が醒めたら俺は森に寝ていた。

「ん……」

ゆっくり起き上がる。……森だ。ザミアの森。でも、なんだかさっきまでとは様子が違う。こう……邪気がないような。

「気がついたか」

落ち着いた声が俺を呼ぶ。はっとして振り返るとそこには見慣れぬ少年がいた。

「君は……」

少年は長い黒髪をしていた。黒いローブをまとっている。片方の前髪が顔の半分を覆っていて、顔がよく見えない。

少年は焚き火をして座っていた。枝を火にくべている。綺麗な少年だ。

「ここは……ザミアの森だよな？」

「ああ」少年は短く答えた。とても静かな雰囲気だ。

「俺……アシュっていう奴と戦ったんだ、そいつの城で」

「……」

「アシュの城、知らないかな。黒い城なんだ」

「壊れていた」

「そ……そう。そう、か。じゃあアシュは俺が倒したんだな。俺は衝撃でここまで吹き飛ばされたらしい。ああ、空が暗くなりかけている。結構時間が経ったんだな。とにかく、君が倒れてる俺を助けてくれたんだね、礼を言うよ」

「ああ」

……会話が續かないな。困った。

「あの、君の名前は？」と聞いたとき、木がざわめいた。

「アデルの気だ」俺は抜剣して構えた。が、腕や肩が痛い。怪我をしているようだ。

「座っている」少年は短く言うと、腰の長い剣を抜いた。変哲のないロングソードのようだ。無造作に抜いてぶらーんとしている。大丈夫なのだろうか。

「ぐおお！」と声をあげて襲ってきたのはカイラだった。リディアの村を襲った奴よりも大きい。これは強敵だ。

「危ない！」と俺が叫ぶが早いか、少年はビュッと剣を軽く振った。剣についた血を振り払うような無造作な薙ぎ方だった。ところが、次の瞬間、カイラの断末魔が聞こえ、カイラは真っ二つになって死んだ。

「え……」

な、なんだ今のは。リュウの居合とも違う。ただあのロングソードを振っただけだ。なのにカイラが真っ二つに……。ノアで極限まで強化した運動神経に、強力なユノを剣に籠めたのだろう。それができるといふことは、凄まじいヴィードの持ち主だということにな

る。

「君は……」おずおずと喋る俺。少年は振り向き、剣を仕舞う。その額は光っていた。

「あ！」

俺は思わず口を手で覆った。

少年は何事もなかったかのように座ると、枝をまた火にくべだした。そして呟く。

「俺は……ラルドゥラだ」

<メルを殺したレレス>

mel 5, si kliiz

使徒ラルドゥラと出会った俺はザミアの森を出てアシェルフィの家へ凱旋した。アシェルフィはリディアたちが防戦し、負傷者はなかった。

家に帰るとリディアが犬みたいに飛びついてきた。俺は皆に無事を報告するとともに、新たな使徒を紹介した。

異性魔王アシュが倒れ、一時アルバザードに平和が訪れた。

と思ったのも束の間、新たな異性魔王が現れた。平和を喜んだアルバザードはまた暗くなった。

俺たちはアシェルフィで学生をしていたが、新たな異性魔王の登場により、戦線に戻らざるをえなかった。

新たな異性魔王は自らをレレスと名乗り、俺たちの前に姿を現した。アシェルフィにてアルシェの使徒はレレスに応戦した。

レレスの力は正直アシュほどではなかった。こちらは 9 人がかりなので戦闘を有利に運べた。皆、戦闘に慣れている。13 歳とは思えない身体能力でレレスとの空中戦を繰り広げた。

ところがそう強くはないのがメルだ。彼女はまだ幼い。5 歳の少女に過ぎない。いずれ強くなるとしても、今はまだ子猫にすぎないのだ。

だが彼女の使徒としての使命感はとても強い。彼女は進んで前線に立ち、戦った。

レレスは不利と見ると、市街へ降りた。住民を巻き込みながらの市街戦はアルシェの使徒にとって不利だった。レレスを探すため、俺たちはいくつかの部隊に拡散した。

メルは俺について走った。

いくつかのパーティに分かれたが、レレスと遭遇したのは俺のパーティだった。

レレスは俺を見つけると、ユノを撃ってきた。俺とメルは応戦する。ユノの応酬をしながら、俺はリディアたちを呼ぶために空中にユノを打ち広げた。

リディアたちが来るまでに 1 分はかかるだろう。その間、少ない戦力で持ちこたえねばならない。

俺は剣を抜いてレレスに飛びかかった。

ザンッと音がして、俺の剣がレレスを半分に切り裂いた。

「よしっ！」と言ったのもつかの間、レレスのいた空間がぐにゃっと曲がった。

しまった、残像だ。俺が切ったのは影だった。

「レレスはッ!？」

俺の半径 1 メルフィ以内にはいない。辺りを見回す。すると、後方のメルが悲鳴をあげた。

「メル!」

レレスはメルの横に現れた。驚いたメルが悲鳴をあげたのだ。

「メル、逃げろ!」

とてもメルでは敵わない。俺は叫ぶと同時にレレスに突っ込んでいった。俺と入れ違いで逃げようと走り出すメル。

レレスはそんなメルを鼻で笑うと、興奮した顔になって、剣を振り上げた。長い手で振り上げた剣を斜め下に突き出す。

剣はすっとメルの背中に入ると、胸のところから顔を覗かせた。

「……え?」

思わず俺はその場に立ち尽くした。

レレスの剣は、メルの胸を貫いていた……。

メルはぼーっと突っ立ったまま、自分の胸から生えてる白い切っ先を眺めていた。両手を剣に近づける。胸から滴った血が剣を伝って落ちる。

そのままメルは目を閉じて、とさっと地面に倒れた。

「……うそ……だろ?」

俺はよろよろと近付いた。メルは……即死だった。心臓を一突き。もう意識もない。

メルが……死んだ。

レレスは俺に呆然とする暇も与えず、即座に剣をメルの死体から引き抜くと、俺に向けて構えた。

俺はぼーっとした顔で剣をぶら下げた。額には紋章が浮かんでいる。紋章を見てたじろぐレレス。

レレスが剣撃で突進してくるが、体から溢れる俺のユノに弾かれて吹き飛ぶ。

「レレス……」

俺は怒りを露にして唸った。

そして言葉にならない声で叫んだ。

踏み込むとともに地面が揺らいた。レレスはあまりの速さに対処もできず、動くことさえできなかった。俺の剣はレレスの目を貫き、そのまま頭を貫いた。

断末魔の悲鳴をあげるレレスの身体の前に手をかざすと、ありったけのユノを撃って、

レスの身体を霊界から粉微塵に消し飛ばした。

レスが死んだ後に残ったのは、暖かい血を流すメル之死体と、駆けつけたリディアが惨状を見た際の悲鳴だけだった。